

アラン

文明国の戦争で真
の原因になるもの
(下)

翻訳 高村昌憲

- 第4 1 章 喜びと犠牲
- 第4 2 章 理念としての宿命論
- 第4 3 章 情熱と利益
- 第4 4 章 訴訟人の情熱
- 第4 5 章 不幸となる偏愛
- 第4 6 章 世界的エゴイズム
- 第4 7 章 情熱のメカニズム
- 第4 8 章 筋肉と神経と血液
- 第4 9 章 神経による発光
- 第5 0 章 筋肉による発光
- 第5 1 章 思考の競争
- 第5 2 章 想像力
- 第5 3 章 詩と散文
- 第5 4 章 情熱の表現
- 第5 5 章 恐怖
- 第5 6 章 怒り
- 第5 7 章 暴力
- 第5 8 章 情熱の中の宿命
- 第5 9 章 狂人たち
- 第6 0 章 運命の呼びかけ
- 第6 1 章 情熱によるお決まりの性格
- 第6 2 章 情熱の模倣
- 第6 3 章 もっと自由な考察
- 第6 4 章 感情の美
- 第6 5 章 平和を愛する者たちの幻想
- 第6 6 章 同主題についての解明
- 第6 7 章 市民の義務
- 第6 8 章 この戦争は新しい出来事です
- 第6 9 章 新聞
- 第7 0 章 判断
- 第7 1 章 二つの崇拜
- 第7 2 章 真の宗教
- 第7 3 章 熱心な人々の地上の平和
- 第7 4 章 愛は勝ちます
- 第7 5 章 不手際
- 第7 6 章 権利と能力
- 第7 7 章 要求
- 第7 8 章 戦争論とその他の怪物たち
- 第7 9 章 正当防衛
- 第8 0 章 二つの確信
- 第8 1 章 意地悪な人々

喜びと犠牲

(DE LA JOIE ET DU SACRIFICE)

1916年2月26日

この不幸な時代には、英雄や母親たちの喜びについて大変良く書かれました。私がそれらの全てを信じていると想像しないで下さい。言葉を集めて書くのは難しくなく、すっかり超人的な判断力でやり遂げた立派な事柄も十分表されます。その他の例もそこに駆り立てますし、宗教の伝統も同じで、それに従えば苦しみの中にしか幸福はありません。私は苦しみの中の幸福という言葉を書きましたが、何かを表した後はその次には想像しません。教義が最も届かない処ではより多くの注意が要求され、その精神を守るためではない時は、よく使われた言葉が発せられても僅かです。そして、ポール・デジャルダンの会談であなたが見出した最良の問題であるこの宗教の発展は、そこに何らかの隠された考えに気付くためには余りに不確実で、余りに安易に取り扱われ易く、余りに簡単に状況に屈服させられていると私は考えることしか出来ません。隠された考えは何時も少し驚かせますし、屢々良識と衝突しますし、取分け基本的な短い表現においてはそうです。その代わりに彼らの衝突前の人間としての喜びの歌や、面倒を見る他人の子供たちを持つとうとする母親たちの喜びの歌や、償いの犠牲の歌などは非常に上手く行きます。もし私が物事の真実を見分けたいと思うなら、私は先ずこれらの全てが同じ目的に向かう大変に多くの出来事の話をめっちゃくちやにしなければなりませんし、それは異論の余地なく市民の平安や全員一致の称賛に値することになります。確かにその上での勝利というものには、殆ど神のような喜びがあり、基本的に恐怖の上での勝利というものにも殆ど神のような喜びがあることも私は十分に信じています。そのことから私は何かを感じてもいました。そして、戦闘砲火の中で、この種の礼拝式において調子外れに歌うような者に何も言わないことは恐らく、少なくとも正しいのです。しかし、私は平和の時代のために書きます。そして、殺戮や怒りや復讐を神聖視することに夢中になっている者や大変容易に想像力の中に入っているこの種の自己陶醉は、かなり危険であると私は理解しています。既に突進している若者たちに、恐らく私はもう大して言うべきことはありません。しかし、弱者である大衆が何度も若者たちを興奮させて、この恐ろしい冒険へ投げ入れるのを私は決して我慢出来ません。そしてその点について、私は極めて簡単な処世訓をあなたに検討して欲しいと思いますし、恐らくそれは許されていることであり、自分自身の生活を重んじないことを称賛することですが、他人の生活ではないのです。私は最早、その点については言いません。もしこの言葉が老人や女性や結核患者を怒らせて顔を赤くさせなかったなら、彼らはそれを聞くまいと誓ったのです。

自己犠牲が前代未聞の驚くべき幸福な人生を明らかにしていると提示しているなら、同じ問題に戻りましょう。この幸福について熟考することなく、自分を犠牲にしなければならないかどうかを何時も自問することは取り残されています。というのもそれは何時も或る種の欲望であるからですが、節度もなければなりません。戦争の恐怖を隠すために、あなたが其処にいること、あなたは其処にいるのが幸福であることを言います。素晴らしい理屈です。「私は幸福です」と言うことは、何も終わりにしていません。それは倫理の基本であり、一人ひとりを親しくします。

(完)

理念としての宿命論
(DU FATALISME COMME DOCTRINE)
1916年2月28日

もしあなたが物事の理念としての哲学を少しでも洞察したいなら、哲学者ルヌヴィエールの本を読んで、そして再読して下さい。ともかくも、何でも答えが何時もあると言えないが、十分に近くで見詰めることは有益であると言わなければなりません。だがその上更に、均衡と懐疑の状態はそこに至る何らかの道によって、私がここに齎したい理性を理解するための精神を準備するには相応しいものです。それらは弁証法的ではありません。それらは容易でもなく困難でもない如何なる反論も招きません。それらが重要であることに気付くためには、長く思考することもしなければなりません。そして、自由という奇妙な問題を考察して下さい。もし人が自由になることが出来るなら、自由になりたいと望むかどうかでしかそうならないのは極めて明白です。この奇妙な考察は私が言いたかったことに通じており、それは宿命論が真実であるということだけからしても信じられているかどうかを知ることです。何故なら外的原因や情熱によって導かれることで容易なものは最早何もないからです。それは自然な状態です。自分自身に自惚れていて、何時も強くそれに触れる傾向に行く精神は漂流する精神で、力から見捨てられています。そして行動が続く時は、そこにあるのは第一にはバロメーターとして全てに敏感で物事の中央に位置する人間のメカニズムとして新しい例になりますが、第二には本当の予感として一つの例になっています。というのも避けられないものとして先ず考えたことは、同じ信仰によってその行為に貢献するからです。もし犯罪に導くと自分で思うなら彼は殺します。もし自殺に導くと自分で思うなら彼は自殺します。もし怠惰が自然で避けられないと自分で思うならそうしますし、以下同様です。又、もし国民全体が戦争は避けられないと思うなら、それは実際に避けられないのはもっと明白です。今日勝ち誇っている予言者たちの多くは、予言したことが既に現実のものになっていると言わねばなりません。そんなことは殆どやりませんが、結論に達するために予言を続けていくのは余りに容易であると私には見えます。多くの原因によって可能となり、予想された戦争が本当に避けられるためには、先ずはそのことを信じなければなりません。その考えを何度も続けて下さい。何故なら、予言したり要求したり行為したりする活発な熱狂者たちの中には、半睡状態のぼうっとした熱狂者たちもいて、彼らは出来事を変えられると思っているかの如く話したり行動したりしようとしませんが、心の底ではそんなことを決して信じていないからです。恐れていたことが起きる時は、或る種の感情の勝利によって十分に見えるものです。彼らはそれを見分けます。気が静まったかのようになり、解放されたかのようになります。彼らはほっとします。実際により良く生きていますと感じます。極めて忍従する中心部分に宿る本当の力を認識します。そして、彼らが或る種の喜びや新発見を引き出しても、私はびっくりしません。この内部の動きは改宗に似ています。これらの人間たちを良く理解して下さい。誠実さがあること、彼らを感じさせること、そして多分この突然の変化に魅惑を感じるものがあることを把握して下さい。従って彼らを当てにしないで下さい、特に彼らのうちの一人では駄目です。勝たねばなりません、そのことを良く分かって下さい、そしてこの予言する魂を絶えず分かって下さい。〈意志〉の娘である〈希望〉に導かねばなりません。それは諺になって言っていたことです。〈天は自ら助くる者を助く〉。意味深い言葉です。

(完)

情熱と利益
(DES PASSIONS ET DE L'INTÉRÊT)
1916年2月29日

本質的な観念をもっと詳細に説明することです。私は〈人間の本质〉という大変に不完全な描写のことを考える時、特にそのことに納得しますし、それは今も言えることですが、それに従って私たちのあらゆる行動が多少なりとも十分に包み隠された個人的利益によって説明されるようになります。もしその様なことをやり始めたなら、書物の人間と塹壕の人間との間にもう一つの対照があり、或る種の超人的奇跡を人は想像しがります。そこから戻るのは、超人的に宣言された戦争という何時も非常に力を持った観念であって、従って避けられません。それ故に私は恐るべき結果や情熱のメカニズムに、大変長い間決して戻りません。あなたは先ず、物事の最終的な秘密がデカルトの『情念論』の中にあることを知らねばなりませんし、外見上はそれ程でもないかも知れませんが、かなり隠されています。そして、この奥深い作品の意味をあなたが把握するのを待って、私は私なりに説明を続けます。そして私がその点について言わねばならないことは、その人間は大変に良く語りますし、彼は全ての行動を損得勘定に従っていて、私は決してそれと一致しませんでした。一人ひとは多少なりとも激しい奇妙な愛を感じました。人は愛に死ぬことが出来ますし、愛に死ぬのを望むことも出来ますし、殺すのを望みそして愛する者を殺すことや、要するにそれが深くなればなる程、取り返しの付かなくなる不幸の中で反乱や激情によって命を投じることも出来ます。どんな意味があって、文字通りにこれらの激しさが軍人になるのかよく観察して下さい。そうです、嫉妬深い男は、大胆に自分の利益に突進して、まるで自分自身が引き裂かれて喜んでいるようでした。私は復讐という粗暴な喜びに固執しませんし、殆ど噂話によって話すだけです。しかし、その感情が最悪なことを押しつける希望と共に、大きな苦痛を受け入れさせているのもよく知られています。そして、これらの情熱というものの中には、心の底から人が行うことの予感があり、或る種の恐怖を生む外部的宿命であることも大変に明白です。それは私自身ですが、自我よりももっと強いものです。

怒りは、激しい発作の中での情熱による一般的な姿です。そして、そこに人が如何に慎重に計算した利益を早く忘れるようになるのかを見るのが出来ますが、それは彼が本来持っていたものでした。怒りは、些細な原因で生じることさえあり、常軌を逸した行動へ駆り立て物事を台無しにするように、実際には有益でないのが普通です。怒りは、決して当事者でない人々や物を罵ることも普通です。そして私は敢えて言いますが、一番深い怒りは、怒っていることを怒り、そこに身を投じているのが分かり、肉体的な激情のように自分を激昂させているのを感じます。子供はだんだん大きく叫びます、何故なら叫んでいるうちに苛々してくるのが基本であるからです。しかし、私はその点に再び戻ります。何時も利益に逆行し、屢々保存するにも逆行する情熱という何らかの狂気を、私はあなたに思い出して貰いたいのですが、それらの情熱の中には恐怖という狂気も少なからずあります。議論好きな者たちは殆ど何時も、後悔した言葉を放つまで腹を立てています。賭け事をする人、口が上手い人、酒を飲む人もその観念と共に渦巻のような情熱に直ぐに身を投じているのであり、彼らはその様な運命にあり、その様に宣告されていて、そこに走る方が価値があるかのように私には見えます。正確に言えば、それは眩暈です。激昂して訴訟を起こす起訴人をあなたは見たことがありませんでしたが、殆ど負けるのは確実で、その他のことと同じ様に破産させる喜びも一緒です。それも小さな戦争ではないでしょうか。

(完)

訴訟人の情熱
(DES PASSIONS DU PLAIDEUR)
1916年4月14日

私は〈訴訟人〉をもう少し身近に調べたいのです、何故なら〈軍人〉の特色を持った人々をそこに見るからです。確かに訴訟は強欲を生むとよく言われていますが、真実らしいものがなくはありません。しかし殆ど何時も訴訟には、より多くの詩情もあります。利益は屢々小さいですが、執拗さは大きいです。弁護士は特に、敵に当人の行為について思うことをはっきりと明白に言うために、よく高い金を支払うことを私たちに言うかも知れませんが、他人を破産させる欲望によって、訴訟で破産する人間を人はよく理解出来ます。同様に利のあることばかりを考えて、決して訴訟しない冷静なけちな人間のことを思うのも容易です。情熱による奇妙な結果を人はもっと普通に考えて欲しいと思います。彼らは、他人の訴訟費用で金持ちに成るために人々は戦争を始めるといふ可笑しな考えに、少なからず信憑性を与えています。イギリスのジャーナリストであるノルマン・アンジェル卿が言うように、損得勘定を当てにすることもありません。というのも名誉を守るとか死者たちの復讐をするためには金に糸目をつけないからです。この種の議論は確かに理性的で、主張するのは何時も正しいのですが、少し偏って見えています。強盗の本能は戦争においても発揮することが出来ますが、それは決して根本的な参戦する原因にはなりません。そして同様に泥棒するために人を殺す殺人行為も又、戦争に似ているものは何もありません。しかし、有名なアナキストたちの強盗による武勲はそれ以上に似ていて、取分け利益を考えずに少なくとも怒りから奪い取っていく時の彼らの事件の目的から言うと似ています。最も気高い勇氣において抗い難い運命と向かい合う名誉と、敢えて言うなら殺された敵への大きな哀れみを、そこに持つことが出来ます。これらの矛盾は考えるには良いことです。魂の純真な状態で情熱の力を生むものは、理性的に判断されるものです。結局のところ情熱がそうであるように理性と全く関係なくそれらを理解することは、盲目的なメカニズムに帰してそれによって支配するには良い方法です。それ故に戦争の理論家程に、私は真の軍人を疑いません。彼ら軍人たちはプラトンが話すことと結ばれている理性の役割を演じているのであり、情熱にとっての命題を生みます。その役割は奴隷の仕事ですが、余り軽蔑されるものでもありません。

(完)

不幸となる偏愛
(D'UNE CERTAINE PRÉDILECTION POUR LE MALHEUR)
1916年3月28日

人々が気に入っているものを探していると言っている時は、気に入った言葉に賭けているのです、まるで賭けや権力や金や数々の称賛が、砂糖や塩と比較出来る味を持っているかの如くです。そして更に、こられの肉体的喜びは、習慣や裁判にも多くが依存しているとさえ言わねばなりません。しかし、人間にとって大変力強い思考の喜びのためには、全てが準備次第であると言わねばなりません。賭けが好きなのは賭博好きです。喧嘩に負けない者はボクサーが好きになるようです。探検家は労働や苦難を探します、以下同様です。大変に単純なこの指摘は、情熱によるこの種の不幸の中で信じられている楽しみが、最早多くの場合、無いかどうかを容易に自分に尋ねるようになります。全てがここでは曖昧です。少なくとも、あらゆる行為の目的のように見做されていて幸福について十分に認識されている決まり事が、大変に抽象的で臆気であると理解することは重要です。恐らく人が望み行うことは、愛していると言えらると思えます。しかし、私はもっと更にその先を行くのであって、取分け壮年になって悲しみを大いに楽しむようになって、悲しみの本質は忘れないと言うまでになります。人は怒りや憎しみを愛することが出来ます。そして一人ひとは特に制度によって、予想される新しい憎しみの動機が多分喜びよりも大きな或る種の満足感を与えていることを知ります。生き生きとした情動は苦しみと同様に乾いた心も目覚めさせて、結局恐ろしい悪で、労働しない退屈を追い払うことはあり得ます。この難しい問題を少しでも克服するには、行為が何時も先行して、記憶と熟考によるのでなければ、誰が感じても何も良く分からないと考えなければなりません。ところでそれは性急な行為の後で判断されます。全てはこれらの記憶の働きにおける幻影であり思い出です。いずれにせよ、人間嫌いは大変に気楽であり、その意味で人は騙されていたのです。これらの感情は喜劇であり、本当の苦しみは自分で良く分かっていると私は敢えて言います。しかし、狂った悲劇俳優がその苦しみをそこに投げ入れると、大部分の人々は彼ら自身によって良く結びついたその苦しみを予想するのは、多くが大変遅くなると信じなければなりません。しかしながら、暗い性格の人が認める栄光は非常に現実的です。というのも単純な肉体的状態に従って物事や未来を明るく変えるのは精神であるからで、それは孤独になって名誉もなかったなら、直ぐに忘れて仕舞うからです。そこから齎されるのは、沢山の人々が慰めは欲しくないし、期待する理由がより強いだけそれだけ苛々することです。そこから宗教は大変容易に、試練は正しく苦しみも正しいという観念を引き出しました。そして、その年齢になって人々が悲しみに傾くや否や現実にそこにいるまで救済策は無く、大変進んで不幸と共に演じていることを更に記憶に留めましょう。

(完)

世界的エゴイズム
(DE L'ÉGOÏSME UNIVERSEL)
1916年3月1日

多くの人々が満足した表現や、明らかに弱者と分かる者が侵略者の起こすような戦争は何も理解しないシステムの生まれる口実になったりした表現の、正確に意味するものが私には決して分かりませんでした。そして、私はそのことに固執します、何故ならそれはここでは未だ思考のために獲得される臃気な知識の例であり、結局のところ全て情熱に席を譲っているからです。病気でであろうとなかろうと、モリエールの演劇『気で病む人』の主人公アルガンのような哀れな人間は、あらゆるものを恐れて生きていて、他人が費用を持つ時は自分自身のために取って置くことしか考えないと理解されるのは極めて明白です。しかし、若くて頑強な者が他の目的を多く申し出るのも明白で、彼が自分のために取って置きたいと望むのは直接的な危険を感じていたり行動したりする時だけで、逃げるためであるよりも寧ろ避けるためです。彼は人命救助者には決して成れません。無謀な者たちはいるもので、彼らは人生を取って置く心配はせずに、試練とか危険へ突進する情熱家というもので、時には無駄になることも期待します。ゲートのウェルテルの暗い憂鬱は気を病む人の恐怖よりも、人間の本质にとっては最早奇妙なものではありません。情熱的で条件付きでしか人生を愛していない人物が、もし金持ちであるとか愛されているとか尊敬されているとかしていたなら、彼は洗淨や罪の浄化を考えている滑稽な者よりも一般的な真実により近いとさえ私は言います。その人生は情熱による大胆さによって発展するのであり、死への恐怖によるものではありません。彼は殆ど、恋の冒険のような最も美しい瞬間に無敵で勇敢を感じさせるような人間ではありません。けちでさえあり、他人のことよりも寧ろ自分のことを考えるので有名な人間であり、もしバルザックが彼のことをよく理解したなら、いわば自分自身のための宝物を十分好きになれるのです。そして、私はよく分かるのですが、彼は何時も自分の喜びに忠実であり、恋人が彼の喜びであり、野心家が彼の喜びであり、英雄が彼の喜びであり、聖人が彼の喜びです。しかし、今は通俗な考えで色々なものを見ているのです。問題は生き生きとした喜びがあるかどうかをまさしく知ることであり、決して激怒でなく、熱狂でなく、陶醉でなく、生き生きとした肉体を保持するのに必要なものとは別のものです。そして、この考えに従って更に、他の例を探して如何に情熱が彼なりの経済に従うよりも寧ろ、消費の法則に従って人間の世界を導いているかを理解するのは非常に重要です。僅かな人々が利益によって導かれていますが、それは大変に残念であると思ひましょう。

しかし、私はまだ拘ってくどく言います。この世を理解することは、或る種の哲学的なものの計算によって全てをやり直して、自分を抑えて一滴ずつぽたぽたとやって来る存在のものではありません。人が理解するものは、バルザックのように情熱による業務の利益計算です。そして、大変によく計算される産業の一般的動因は、殆ど計算しないで熱愛した狂気の中でだんだんと燃え尽きる情熱であると言われていました。しかし、今はそのような見方で十分です。あなたが自分を見出すためには、もう読者である必要はありません。そして、以上が戦場の人間です。英知は、あるが儘を先ず理解することにあります。もし何故そうなのかと尋ねられれば、私はそんな質問はいつでも良いと答えます。やるべきことは沢山あり、人生は短いのです。

(完)

情熱のメカニズム
(DU MÉCANISME DES PASSIONS)
1916年3月3日

人間の肉体の仕組みは、デカルトの時代よりも今日では一般的に良く分かってきています。そして、事物に関して何らかの知識を持っている多くの人々は、少なくとも今は寧ろそのメカニズムを考察する方に傾いていて、感情の領域においては私が話した宿命論と一致するようになります。それ故に私がここで言うことは、人間の本質を正確に描写するために私が考えるのは一方では肉体のメカニズムであり、それは私たちを情熱に従わせていますが、他方では真実に従って思考し、肉体の行為に向かわせる力であり、私が学校での議論に嵌まり込むことではありません。実際に私は、怒りや陰気や嫌悪や偽善が如何に生まれて大きくなるかを大変よく知っていますし、多少なりともこれらの恐るべき敵に如何にして勝つかも知っています。確かに全ては私の中にある冷淡で人間的でない力である自然が齎しますが、私の中の理性的で人間的な力も同じで、二つの異なった形式に基づくものであり、盲目的なメカニズムと改革的な意志です。人が多分望むもの全てを言葉で行う原理原則の領域まで再上昇することよりも、最も緊急を要する義務の中の細部にまで降下する方が気になっているだけのことなのです。兎に角、それ故に如何に動物の組織構造が情熱を生んで大きくさせているか、人はその大筋を習熟した概念で説明することが出来ます。しかし神経細胞の中の新しい細部の知識は、人の信じている程に進歩することもないので。

肉体の活動が全て意志に従っていないことは、誰もがよく知っています。心臓がもっと早く脈打つのを、直接妨げる人は誰もいません。消化器官は、例えば嚥下活動において敏感で自動的に行われ、犬とか猫の活動と同じ様に殆ど私たちの意志の思い通りになりません。私は無意識に欠伸をします。私は気を紛らしても、しゃっくりや吐き気を鎮めることが出来ません。そして、例えば神経の発作によってこれらの動物たちはお互いに如何に結びついて肉体を作るか良く理解されていますが、人が最善の動きを諦めると、筋肉の拘縮や無駄な動きでへとへとになって仕舞います。私は直ぐに極端な奴隷状態になります。そして、この例は私たちに与えられている問題にも少なからず関係しています。痙攣して自分自身を引き裂く弱い女性を見るよりも、殺し合う男性を見る方が最早奇妙でなくなります。しかし、今は少なくともざっとこの動物のメカニズムを述べなければなりません。情熱家が何時もそうする様に思考の尊さや姿をこれらの痙攣に与えないで、デカルトがそうすることを望んだのと同様に肉体における痙攣を拒絶することがはるかに重要です。

(完)

筋肉と神経と血液
(DES MUSCLES, DES NERFS ET DU SANG)
1916年3月3日

人体の活動の原因となるものの全てが筋肉と言われています。休息している時の筋肉は両端に腱が付いていて、紡錘の形をしています。もし電気で蛙の筋肉を興奮させたなら、他の器官と分離させていても、丸い形になって収縮し、両端の付着点が接近するようになります。何回かの収縮の後にはだんだんと動きがなくなり、筋肉は疲れて自動力がなくなります。しかし、その疲れは本来言われているへとへとに疲れた状態ではなくて寧ろ労働の生産物とか廃物に繋がっています。それを証明するには、アルコールの中でこの筋肉を洗い、問題の廃物を溶かしても再び収縮することが出来ますし、何回でも可能です。

今はその考え方で筋肉をしかるべき場所に戻さねばなりませんし、神経から来る刺激に従っているのを理解しなければなりませんし、それと同時に筋肉を流れる血液によって洗われて栄養が与えられ、筋の中を循環してあらゆる廃物をきれいにして、そして新しい細胞に委ねていることも理解しなければなりません。私は概略を言っています。ここでの問題は、それ以上知る必要はありません。神経に関しては、大変複雑な中枢センターである脳に、最終的には結びついた電線のように複雑な組織網と比べて下さい。一方は、様々な部分で受け取った印象、特に眼、耳などで、ぶつかったり乱れたり病害が与えられたりする限り、体の内や外のあらゆる処で受け取った印象をそこに持って来ます。他方は、衝撃とか、もしあなたが望むなら伝言を筋肉に運び、それは筋肉を収縮させて、その結果最終的には歩いたり腕を上げたり、眼の前に手を差し出したりすることなどの活動を行います。棒が私の眼に近付いて来るのを見ると、最初の一歩目には第二次中枢センターによって瞼が閉じられ、二歩目には直ぐによく知っている他のセンターによって体全体が背後に引き、そして三歩目には中枢センターによって両眼を守らなければならないので手を差し出します。しかし、ここで理解しなければならないことは、全て有益で合理的であるこれらの行為が、多少なりとも他の行為とか寧ろ非常に愚かな反応を齎しますが、それは全く何の役にも立ちません。例えば心臓が急にどきどきして呼吸が止まり、体全体で飛び上がり、手足が震え、汗や身震いが体中に出ます。以上が情熱的側面で起きることです。そして突然に起きるこれらの動きが、有益な活動を頻繁に邪魔するのは明らかです。これらの動きが私たちに麻痺させるとか、ぎこちなくさせていると感じる時、私たちは恐怖というものを実感します。これらの動きが私たちの行為を助けて、もっと活発で有効にさせるようになると感じるなら、私たちが感じるのは寧ろ怒りです。そして、もしこの二重の活動が目的を間違えた不必要な行動や叫びや動作に浪費するとしたなら、それは熱狂とか激怒を覚える時です。恐怖と同じ様なそれらの感情は、痙攣とか神経の発作とか更に筋肉を強ばらせて拘縮させることにもなり得ます。そして失神や、時としては死んで全てが終わることもあり得ますし、まるで不規則なこれらの行為は私たちが自分自身で喉を締めているようでした。汗や涙や叫びや動作は、筋肉による騒乱のようなものの結果です。しかし、ここではそれらの原因を見てみましょう。

私が既にそのことを推測したように、神経の一方は直接脳と接続していて（脳それ自体は集合の中心です）、他方は他のものと結びついている中心であり、沢山の方法により結局はそれらの媒介を通して脳に結びついていることが解剖して確認されています。電信線をもった神経の比較は、激しい衝撃が外部器官から伝えられると起きていることを理解する助けになりますし、例えば臓腑の痛みのように内部器官から伝えられても同じです。本を読む前に、見抜くことを先ず試みて下さい。

(完)

神経による発光
(DE L'IRRADIATION PAR LES NERFS)
1916年3月4日

神経の中を伝えられて行くものは良く分かっていません。兎に角、最初の印象以後には変化が進展して行くのは事実です。そしてその変化は、行かなければならない決定された処へ岐路を通過して案内されるとは想像しないようにして下さい。それは神経のひもに従って伝わるのです。神経中枢というものにぶつかって方向が変わったり、それ以上に広がったりします。そして注目すべきことは音が出て広がって行くように、転がる雪崩のように決して弱くならないで、あるいは陣地の不安のように伝わって行くうちに大きくなって行くのです。それに触れる時、同様に何らかの書かれた命令が筋肉に齎されると信じるのも止めましょう。反対に、何時も全ては一つの衝撃でしかないと推測されますし、それによって筋肉は目覚めたり収縮したりさせられ、多分その衝撃がそれ自体でより活発になるだけに、それだけますます力強くなります。従ってあらゆる意味で広がる衝撃にとって筋肉というものは、目覚めたり緊張したりするのでしょうか。職人やフェンシングをする人や音楽家に見る行為の正確さに比べれば何という混雑さでしょう。大変なものです。しかし、私は情熱を基本としていて非常に不器用になり得るように見える人々の或る種の不安も、彼らが感動しているとしても正しく書きます。但し、筋肉というものが同時に全てのエンジンの力に発展することはあり得ません。第一に、筋肉は全て同時に回復されません。次に、動く部分を全て等しく同時には引っ張れません。動物の感情は耳や尾の最も自由に動く部分に現れることを、ダーウィンは観察しました。しかし同時に理解しなければならないことで重要なことは、最も自由自在な一瞬の動きは、体の体勢によるということです。前方に傾いた人間は走るのを容易にします。しかし、もし倒されたなら、その衝撃は先ず手や足を動かします。この考えを続けて下さい、あなたは姿勢が屢々行為を決定するのを理解しますし、拳を握れば人は機械的に叩くのを容易にします。そこから私は、情熱を鎮めるための有力な方法を引き出します。しかしそれは全然知られていませんが、最初の衝撃はバランスをとった姿勢で受けて、考える前に動作しないことです。兎に角、敵の筋肉の収縮というものもお互いに麻痺していて、それには硬直と動かないでいる努力が〈続く〉のであり、胸を麻痺させて喉を締め付け、よく知られた結果を生み、屢々書かれるまでになります。しかし、情熱の罨は次のとおりで、それに都合の良い動きとはまさしく最も考えない者です。咳をする一人ひとり咳をして自分に腹を立て、窒息している人は自分で体を硬くし、怒りがこみ上げてくるのを感じている人は自分の怒りそのものに腹を立てます。私が以前から言っているように理由はどうでも良いのです。私たちの最初の動きを導くはっきりとした目的も、理由が無いことをこの梗概で示せば私は十分ですが、それは盲目のメカニズムであり、その人がこれから行うことを予告する神託としてよく受け取るものです。ギリシア神話のアイアスは「私は、神が私の手と足を動かしているのを感じる」と言いました。偶像崇拜はその人が最初の反応によって現れるのが自分自身である、と信じて仕舞っても少しも恐れません。というのもこの観察によって、他のものよりも多く結びついているからで、そこから彼は性格とか行動とかに関して或る種の宿命を感じます。その時に形作らねばならない最高の観念とは、その後で身を捧げないとしても自分自身でこの騒動を鎮めることです。そして本来の意味での行動の後でも、もししなければならなかったとしても理性ある人間は決して走ってはなりませんし、拳の一撃を崇めてもなりません。

(完)

筋肉による発光
(DE L'IRRADIATION PAR LES MUSCLES)
1916年3月5日

肉体の各部分が物体を感じるように他の部分を感じることを、次に良く考えなければなりません。筋肉は一方から他方へ働きかけますが、それは神経の一瞬の働きであるとか、直接の接触によるのでしょうか、大したことはありません。その様にして筋肉はお互いに目覚めます。そして、重さのせいであらゆる一方の動きで変わるものであることも言わねばなりません。というのも動きというものは、均衡を変えて他の姿勢とか補整する動きを要求するからです。例えばもし私が腕を前に出したら、腰や背中や足は、少し体の後方へ傾けなければなりません。習慣もそれに加わります。つまり身に付いた動きは、容易に身抜けられるものです。いずれにせよ、一つの動きは他を引っ張り、そして止めなければなりません。私はもう少し昔から言われている表現で論じてみます。しかし誰もが既に、生き生きとした動作は一連の行動を如何に引っ張るかを理解することが出来ます。呼吸と心臓は体全体と自然に結ばれていて、順番に反応しています。何故なら先ず最初に、非常に豊富な神経組織があり、そして殆どが脳から独立していて、それらを通して心臓や大小の管が縮んだり膨らんだりして、あちらこちらで血液の波を温かいシャワーのように放出しています。しかし、筋肉の中の同じ働きも血液の波を呼び寄せて循環させるのに貢献していて、筋肉にも新しい力とより豊富な栄養を齎しています。そこからは動揺する動きが自分自身の生活を保ち、私たちも見ているように動揺を正当化する思考さえも保つのを理解することが出来ます。そして容易に眠りから逃れられませんか、いったん眠ると人は容易に戻りませんし、いったん遠くへ離れます。そして、私たちの意志はこのメカニズムを間接にしか殆ど働きかけられませんでした。少なくとも機械的な動揺に意志的な行動を加えないためには、それ自体と共に大変に悪賢くならねばなりませんし、その様なメカニズムを判断するために言葉は殆ど要りません。あなたは機械でしかなく、殆ど言葉ではなく、多分全てがデカルトなのです。しかし、余り早く行くのは止めましょう。ここでは筋肉が疲労によって自然に鎮まることに注意すべきであり、同様に他の部分も眠らせて、それ程動かなくなりました。というのも廃物は先ず疲労の原因になり、血液中を循環して、腎臓から排出される前に至る所を或る種の麻痺状態にしてまき散らすからです。しかし、もっと強い刺激は筋肉に新しい嵐を爆発させることが出来るのも理解しなければなりません。そして非常に長いものです。少なくとも物理的にこの方法で説明出来るのは、期待と失望の賭けです。しかし、彼らは殆どが純真ですが、直ぐに理屈を考え出します。それは余りに多く食べた料理を上手に話せない者と同じように滑稽です。でも私は急いで話しすぎています。このメカニズムが大変に力があると考えている者たちは、デカルトの言葉を考察しているのでしょうか。人は上手に犬を調教します。何故自分の肉体も調教しようとしないのでしょうか。そして、もしそれを無邪気に行ったとしても、痙攣的な活動しか見ない者が最後には国民にこの痙攣を生むかもしれないのなら、国民が実地に適用する道具によっては大変に恐ろしいことです。

(次章へ続く)

思考の競争
(LE COUPS DES PENSÉES)
1916年3月6日

私はここで最も奇妙で最も隠された問題に手を付けます。人間たちは予測したことや、暗示に忠実に従う神経病患者たちの例に良く見られるように成りたいと望んだことさえも、自然に信じるようになりますが、同時に屢々それが正しいと望んだ技術者たちの理性も発見します。私たちの肉体の活動は、如何にして感情や考えを表現するのかを私は今説明したいのです。その様な肉体の動揺は鎮まることがなく、反対に倍加します。それは頭脳の閃きとは別のものでしかなくとも言えます。神経中枢の中心である脳まで刺激が昇って来る時は、同時に私たちが感じることもなく行う何かの意識を持つのであって、一般的に認められています。反対に内面の中枢にしか関心のない活動は、私たちが持ったり感じたり望んだりすることについて効果がありません。大雑把に言わねばならないことの多くはそこなのです。でも詳細に戻りましょう。

筋肉の活動は、脳にまで到達し得る刺激が起源になります。その場合に私が言うのは、私の肉体の中で起きていることを多少なりとも漠然と私が感じていることです。しかし更に私は、眼や耳や皮膚等にやって来るもののように純然たる感覚を識別しなければなりません、そこから私は大変に良く認識するようになるのです、例えば敵との射程距離や私が腕を伸ばすことです。しかし、情熱が関心を持っているのは、筋肉の塊における激発、沢山の活動の始まりと収縮、血液の波の分配と圧力における変化によるはるかに多い混乱を認識することです。それは脳までの内面の中枢に昇って来るざわめきのようなものであり、あるいは要約された認識のようなものであり、そこでは何もはっきりしていませんが、全てが何かに貢献しています。その様なものがより明確な知覚や記憶や予測と結びついた大変に親しく適確な話をする感情になります。このメカニズムは私たちの現代の認識と、恐らく私たちの方法をあの世で大変複雑にさせられます。しかし、大変な数の中枢神経で作られていて、全てが千通りの方法で結びついているものとしての脳を想像するなら、そして同時に私たちの思考の道筋と、脳の中で一本の道とか他の道が続いているように神経の刺激が結合しているとするなら、その原則は余りに明白です。そこから出発すると、人はここで既に完全なメカニズムに没入することが出来ますし、それは完全な宿命論を意味して、それに従って誰もが自分の思考も感情も力が持たなくなって仕舞います。私は既にこの考えを何故排除するのかを言いましたし、そしてここで繰り返して復習出来ますし、多分更にもっと強い印象を与えますし、動揺する肉体から出るものを専ら観念と見做す者は、秩序も選択も好みも拒否もなく、まさしく狂人であり、その表情を少し和らげるために衝動的な人と言おう。そして、それらの思考における宿命の感情は非常識な言行と狂気というものの土台になっています。従って私は彼らを判断し、思考を矯正し、相当の行動を我慢するのに決して疲れぬ人のために書いていますし、要するにその人が未来を創るように働くために書いています。そしてあなたの人間的な生活の同じ中心に、この信頼と抗い難い偏見を気付かせるのは無駄ではありません。もしあなたが決してそれを見付けなかったとするなら、私はあなたに言うべきことは何もありません。

(完)

想像力
(DE L'IMAGINATION)
1916年3月7日

私がこれまで述べたことに従って、情熱的な人間を肉体の震えや活動というものに注意して表したいことは信じて貰えることと思います。しかし、そんなことはありません。この哀れな瞑想は、病気の時や憂鬱な時に会います。しかし、健康で力強い時には少なくとも注意力が回転しているとすれば、心臓の動悸や筋肉の活動に沿って長く一点に注がれません。対象物や障害物や敵を探しながら、注意力は何時もの慣れた世界で彼の周りを飛び跳ねます。そして、もしその個人が彼を取り巻く実際の対象を、経験による慎重さで自分自身を語るのにとどめたなら、それが知覚になります。その様に行いながら彼が強く感じる多くの印象は、彼自身の肉体から来ることを多分理解するようになります。しかし、生き生きとした印象においては、証拠を無視させて説得させる力があります。但し、間違いのない知覚は決してありません。デカルトのように語るには、私たちの肉体による感情に従って私たちを取り巻く事物を判断することになるのは何時もです。かくしてその熱病患者は葡萄酒が安いと判断し、そして大変に暑い場所から出た人間は大変に寒い日だと判断します。更に同様に、疲れた人間は自分の重荷が普通より重いと信じます。そして想像力のメカニズムや原因はこの単純な例の方が何よりも知覚可能であるとしても、この種の間違いを指摘するには一般的に〈想像力〉の問題を使用しません。想像力とのずれというものにおいては何時も人が感じるものがあり、それは証明に役立ちますが、人が判断することは習慣や思い出や実際の対象に依存しています。信者は実際に自分の体の中に力や幸福や満足を感じています。そして、彼らの眼は実際に白い尾のようなものを受け取っています。彼はその時、〈聖母マリア〉が現れて彼に話をしていると判断します。そして彼の知らない間に、彼の肉体が本当の印象を描いていて、想像力が尾ひれを付けているのを誰もが理解します。私たちの本来の耳を打つ言葉は、私たちの言うこと以上のものを聞かせます。その様なことは視覚では珍しいことです。恋人の裏切り行為を想像する情熱的な人間にとっては、視覚も恐らくもっと弱く、もっと不安定であることはよくあります。しかし、その間違いは何時も同じ原因が行っているのであり、要するにその個人が知覚しようとしていることであり、十分な点検もなく知覚しているのであり、憂鬱や恐怖や不安や怒りのように彼の肉体による現在の感情をよく説明出来ているものです。長い世紀もの間、人類は一列になった視覚の中央で生きてきました。それらの周りで彼らの情熱というものが踊っていたのです。ところでその人の主要な進歩は、彼を取り巻く対象の視覚を大変良く識別する情熱家であることです。しかし彼は、思い出のためにしろ、もし批判の前にもう少し前進したいなら予言や占いの見方にしろ、既にそれらのことを行っています。というのもこれらの想像力が原因に立ち戻らない限り、その印象が説得する力を守っています。従って過去と現在とありそうなことは何時も情熱と結びついていなければなりません。あるいは寧ろ、それは情熱の中の情動へ変わることを仮定した和合です。ここでは情熱による偏見や所謂宗教的見解の中にある緊密な繋がりが把握されます。そこから苦しみや肉体の不調による不安にある人間が容易に信じるのは、彼には何人もの敵がいて、彼らの罠に弱い兆候や何時も避けられない不幸そのものを想像するので、実際に未来にそれを見て仕舞うことを人は理解します。疑い深い人間によって導かれて直ぐに憎む体験が、如何にして直ぐにより強固な証拠を生むかは一人ひとりが理解出来ることです。人が恐れることを引き寄せたり生むことすらあるのを恐れる方法があります。そこから不幸を予言する者への信用が長く続き、良いことやためになることを予言する者への有用性が長く続きます。しかし、少なくとも善き予言者を見付けることよりももっと高次の英知を目指さなければなりません。そして、私が説明した原因について少しは続く熟考によって、一人ひとり希望し望むことの予言をする善き人に自分自身が成ることが出来て、悪しき予言者を無視するように成ることが出来るのです。

(完)

詩と散文
(DE LA POÉSIE ET DE LA PROSE)
1916年3月9日

行進曲は、言葉が無くても既に私たちの体を、活発で決心した行動を取ろうとさせますし、同時に大胆な感情と征服者のような考えを与えます。私としては出来る限りこの効果に抵抗しますし、それらが熟考された行動を助けない限り抵抗します。それでいながら私もそれらの力を感じています。そこから純真な人間たちの上で繰り返す軍人たちの声の力と感情は、何時も彼らの考えの結果であると信じている人を判断しましょう。これらの効果はよく知られていて大変に粗雑ですが、詩の秘密を教えてください。音楽が言葉のハーモニーとリズムに帰する時でさえ、メロディーは非常に多くの言葉を何時も導入しています。従って対象が言葉によって示されている時も、言葉と同じ音が私たちの筋肉を動かして目覚めさせ、かくしてこれらの対象が決して十分に説明しない情動を私たちに感じさせます。そこから詩の効果は二倍になります。先ずそれらの対象は私たちには贈り物のようなもので、私たちの活発な情動がそれを証明していて、何時も投げ返されて強くなります。そこから詩句や歌の中にあるものとしての描写力が生まれます。しかし、取分けそれらの対象は言葉の本来の意味で、眼に見えない或る力が隠されている盲目的に崇拝する物神のように見えます。感情の活発さは、ここでは勝つことが出来るのを証明しています。その効果は殆ど声を出さない詩に特に注目すべきで、そこで情熱的人間が私が話したメカニズムによって、彼が感じている動揺というものの原因をそこに探し求めます。その時は全てが意味を持ち、全てが言葉になり、全てが予告になります。異教徒の多くの神々が姿を現します。それらの感動的な瞑想の原則が十分説明されます。一人ひとは、最も単純な風景を屢々変えて仕舞う憂鬱や喜びの効果を経験によって知ります。多分、行動への準備、少しの不安、加速した役割があると注意されませんが、もっと力強い効果を生みます。戦争による興奮は道德秩序という感情を立て直さずに、新しい表現を導くこともない事実について思考するのが有効ですが、それに反してそれらの興奮は対象を描写するものを鮮明にして明るくします。事物は〈魔法〉によってその時は美しくなります。そして、その魔法はその人間が対象の中でなりたいと思う新しい力以外の何ものでもありませんし、或る種の揺れ動く雄弁なものにして仕舞います。

如何なる興奮も、故意で少なくとも人間による危険が待っていること以上に強烈なものは無く、戦争が最も力強い詩を閉じ込めているのは明白です。しかし、情熱の詩というものも秩序に変わりありません、というのも情熱というものは、〈宿命〉の観念に基づいて言われたように戦争へ行くからです。如何に彼は戦争を思い起こして青白い薄いイメージに色彩を付けるようになるのか、如何に彼はそれを呼び、如何に愛するのか、今は詩情の無い詩人を考えましょう、感動の無い貧しい彼の心にとって血潮は少ないのです。しかし、若くて高潔な人に対しての呪文の効果を超えて予測しません。鎮めなければならなくなると、不器用な人は馬たちに鞭を入れます。そして、それが十万人の生命を犠牲にすることもあり得ます。ところで私としては十万人の生命の方を好みますし、世界中の詩よりもたった一つの生命でさえもその方を好みます。しかし、それは感情でしかありません。私は只、それだけを示すのであって、少しも証明するつもりはありません。

もし最良の未来が可能なら、それは散文作品であって、人がよく言うような下劣さも平板さもありません。何故なら散文は、既にモンテーニュ、ラ・ブリュイエール、モンテスキュー、スタンダールに見るように美と力強さがあるからです。私は雄弁やそれに似たもの全てを散文と考えているわけではありません。そうです、しかし表現には特色があり、不規則な進行、自発的に切れた調子、衝突、停止、読み直すか良く考えなければならないという特徴があります。各々の事物はその時しかるべき所にあり、私の中には神々がいて、秩序の中に事物があり、少なくともそれ自体で整えられています。そして、もう予告することはありませんが、公平で無言で全てを生む

ために行動するための道具です。解放された精神は、少なくともそれらを照らしています。もし悪が時々襲ったなら、それは肉体と精神を識別してデカルトの精神を差し出す処でもあります。そして、私は私の主題に留まります。というのも戦争の悪魔とは事物の中に閉じ込められた精神と同じものであり、最後には機械化されて、激しく怒ったり噛んだりしないこともありません。しかし、もう十分です。その問題は他の処でもっとよく明らかになるでしょう。

(完)

情熱の表現
(DE L'EXPRESSION DES PASSIONS)
1916年3月10日

他の主題は放って置いて情熱に関する自然な言葉を私はここで簡単に、しかし正確に述べてみたいと思います。先ずそれらの言葉の中で最も明白である活動を数えてみましょう、しかしそれらは厳密に言うなら話すための情熱よりも寧ろ行動を告げています。ところで活動には、開始する活動と抑制する活動があり、それらは動作となり、情熱と呼ばれている或る種の内面的戦いを最も良く説明しています。動作の中で最も表現に富んでいるのは顔つきです。他の何よりも敏感です。何故なら動きが多いところは軽快そうで大変に良く分かるからです。限られた僅かな言葉で言える限りにおいて、鍵はこの中にあります。皺を寄せた眉は注意しているのを表します。口は、話さないように努めるとか、素直に話そうとしているのを大変強く示すことが出来ます。あるいは顎は、他者から示される何らかの拘縮や自分の内面の闘争でしっかりと噛み締めます。顔を赤く染めたり引いたりする血液は、或る種の印を与えており、赤い顔は嘘を見抜かれる恐れを表していると誰もが知っています。大胆さがそこで支配している時は怒りを表しています。その代わりに蒼白い顔は多くの場合、恐怖で震えているのを表しています。手の動きが表しているのも三種類あります。叩くためと、取るとか受けるためと、拒否するためです。私は誰もが知っていることをくどく言いません、情熱のメカニズムが更にもっと慣れて来る間も除きます。

しかし、それは叫びや声であるからですと言いましょ。びっくりして全ての筋肉が私が言ったように緊張すると、喉は同じ原因で締め付けられ、胸部がふいごのように突然にぺちゃんこになることは良く起こります。そして、自然言語の一言である声を発します。そして、その初期の言葉は子供の時に既に観察されますし、何時も口や喉や肺の状態によって生じます。それを良く説明するのは、ママという言葉です。それから一番目に特に注目しなければならないのは、吠えたり、唸ったり、口笛を吹いたり、匂いを嗅ぐ時に良く見るように、人が教える言葉の中に自然言語の形跡が良く残されていることです。二番目は、情熱が叫びに対する何らかの言葉というものを伝えることです。そしてこの情熱の言葉が、その意味では情熱と同じ活動を他の人の裡にも生じることを何時も理解させています。思想が伝達されるようになるのもそこからです。しかし兎も角も、情熱の模倣とか伝染のことを話すのは止めましょ。私は、人が自分自身に保持している言語や言葉の力を少なくともここで考察したいのです。子供が叫ぶのは、自分自身の声を聞き、自分自身に脅え、自分自身に腹を立て、そして強く叫ぶしかありません。その様にして情熱というものは印象によって大きくなりますし、取分けいわばそれ自体に現れて、予言し、その声は興奮を倍にして、そこから情熱が名付けた眼に見えないものさえも存在させています。魔法、まじない、呪いの様な言葉に、特にそれ自体の本性からしての意味を与えなければなりませんし、この大変に容易なメカニズムにおいても宣誓の始まりや誓いの力を理解するように配慮しなければなりません。更に、オーギュスト・コントの『実証政治学』の一章を読んで下さい、それは全ての章が奥深いです。自分の考えに従った本性の自分の言葉の使用が最高で、この救いが無ければ不可能で、彼は自分自身を求めて祈りたいのです。それは孤独な真実であることもつけ加えます。実際には彼と共に、高貴で明晰で穏やかな言葉が内面の平安に多く貢献することが出来ます。しかし、均衡と節度をもった肉体の機械というものを認めながら、その理由も良く理解しましょう。従って彼自身の言葉は、私たちが思考することもなく間接的にしか働きかけない数え切れない筋肉による体操のようなものです。逆に、無秩序な言葉は古代人も良く下品と呼んでいましたが、私たちの情熱を狂気にまで持って行くようになって仕舞います。

結局のところ、言葉と思考の間に良く隠された関係をもう一度注意して見なければなりませんし、それは人が思考する前に自然に話すことにあり、人が思考することを知っていて自分の心に耳を傾けるやり方です。そして、最も理性的な人々は、合理的な処をいわば口述を基にして書

いたり、他者に耳を傾けさせて聞いて貰うような逆のひっくり返した方法を重視するに違いありません。そして、正確で清潔な概念を形作ることの困難を知っている人々は決してそれに驚きません。しかしこの観察からは、感動しているものは全てが明白であると信じる気になっている人々を有効に警告することが出来ます、それ故に人々は先ず言うことを考え、その次に道理に叶っていないことを言葉に結びつけて意見を言いますが、まるで彼らは最初に浮かんだ言葉に従って是が非でも行動することを誓っていたかのようです。それは脳ではなくて、腹や胃を使って思考しているのです。

(完)

恐怖

(DE LA PEUR)

1916年3月11日

情熱というものの中には恐怖もあります。そして恐怖は多分、強烈な印象として最高の効果があります。筋肉が如何なるものにも調整されず、少なくとも体の状態や筋肉の力によって、如何に動くのかを私は説明しませんでした。そこから生じることは、立っている人と眠っている人では恐怖が同じでなく、座っている人と走っている人でも同じではないということです。例えば座っている人は直ぐに立とうとしますし、心臓と肺の実際の活動を予想するのは極めて容易です。それに筋肉の収縮は外部からの活動がなくても、何時も多少なりとも呼吸と脈を乱します。恐怖の注目すべき結果の一つが生じるのもここにあります。それは恐怖が不安として感じられることであり、そしてそのことを考える暇な時間があると新しい恐怖の始まりになり、その様にして自然に悪化して、外部の出来事が全く見えなくなるのと同じです。不安は、この注意深い恐怖の避けられない結果です。そして、信じやすいその人の心の裡の不安は、何時も次の危険の徴候を捕らえます。この同じ情動によって精神は眼を覚まし、注意力は過剰となり、幾つもの推測が働きます。夜とか沈黙しか必要としません、あるいは茂みとかその種の物の様に自然と雑然とした対象しか必要としませんし、それは二重の土台を持っている様な間違った知覚を私たちに与えるためであると人は気付いています。それらは肉体の障害において起きる何かで、手やこめかみの暖かさや寒さ、眼の前の輝き、私たちの耳が知覚する自分自身の叫び声、耳鳴り、肉体の突然の動きが齎す衝撃などです。その他は恐怖という亡霊が事物の外観に現れて間違っただけで解釈されます。原因についての内面的な話とか理屈はどうかと言うと、それらを妨げるものは何もありません。そこから容易に発端となる、原因が分からない恐ろしい話や奇妙な確信が生まれます。調整されない思考は自然に際限のない錯乱に陥るということを、人々は絶対に考えねばなりません。そして、明瞭に話をして、自然の感情に従えば私たちの思考は何時も狂っています。しかし全く反対に大部分の人々は、神託のようにそれを聞いて、更に彼ら自身や人々に大袈裟に言います。この世の悲劇俳優に成っているのです。古代人たちの行動や話の中に自制や慎ましさが愛されていたことは、価値あることと理解されます。この倫理的決まりは、礼儀以上のものを目指しています。しかし、もう十分です、というのもこの問題は終わりがなく広がって行くからです。少なくとも結論をはっきりと言いますが、恐怖は行為によって自然と回復します。何故でしょうか。先ず筋肉が使われるようになるからで、同様に行動が注意力を抛り所にして行おうとしている間に、接近した事物によって注意力が生まれるからです。そこから確実に歩くと亡霊は逃げて行くというのが民衆の考えです。そして、悪魔を祓う宗教的行為も同じ種類の効果を生んでいます。祈禱も同じです。それらの行動は恐怖に対しての体操です。しかし、それを知らない者は〈神〉を恐れて悪魔を恐れるように、他人の情熱に陥る危険を負っています。そして、それはせいぜい半人前の英知でしかありません。

(完)

怒り

(DE LA COLÈRE)

1916年3月12日

多くの人々が勇気と呼んでいる怒りについて、絶対的に恐怖の反対にあるものではない、と先ず言わねばなりません。良く見るならそれは積極的な恐怖でしかありません。誰もが恐怖から怒りへ如何に移るかを、経験によって知っています。しかし、恐怖によるこの激しい影響は同時にそれを終わらせて、正確に言えば怒りによる情熱ではなく寧ろ怒りによる行動です。情熱は休息と行動の間に置かれています。情熱は不毛の動揺の中にあり、動作や話や思考により表現されます。そして、時には思い上がった高慢な怒りが恐怖との類似点を見せなくします。しかし良く見ると、怒りは恐怖のようなもののショックによって何時も始まるのが分かります。体が安定していて頑健で疲れていない時には、恐怖を抱いても長続きしませんし、筋肉の騒乱は直ぐに行動の形を整えます。だが激しい怒りが大きな恐怖と同じ結果を生むことに変わりありません。そして神経の発作は、怒りか恐怖のどちらかによって、病的な結果になり得ます。

怒りの中で特に注意することになっているのは、怒りそのものによって激化させることであり、戦うためには敵に期待しないことです。暴力は先ず最初に暴力そのものに対して行使され、実際に何時も暴力そのものに対峙します。そこから私たちは多分、戦争を決定する奇妙な関係を思い出し、その中では敵も実際に損をするきっかけしかないのです。この性格は何時も怒りの中にあるのです。そして、もし事物のメカニズムを明白に知っていなければ、動機によって説明するための奇妙な体系をでっち上げなければなりません。但し何時もそれには気付きます、というのも人々は望んでいることの洒落を言ったりして言葉にするからです。

恐怖から生じる怒りを理解している注目すべき場合は、論争の一つとなり、直ぐに情熱的になります、何故なら障害に対して非常に臆病な雄弁家は大声を出し、喉を絞り、大変に早く興奮するからです。ここでは原因と結果の本当の順番を観察しなければなりません。それは大声を出すから反論者に不幸を望むのではなくて、反対に或る種の憎しみがそこにやって来るから大声を出しているのです。これらの原因が分かっている者が良く笑っているのです。

(完)

暴力

(DE LA VIOLENCE)

1916年3月13日

暴力行為は或る種の緩和であり、情熱による激しい発作の喜びでさえあると理解されて言われれば恐らく十分であり、そのことは重要ではありません。対象や観念はここでは二次的でしかありません。それでもやはり情熱は或る種の筋肉の病気であり、もっと正確に言うとするなら、騒々しい興奮の自然な結果に何時も変わりありません。しかし、もっと良く見なければなりません。情熱はそれ自身によって力を要する仕事であり、少なくとも力づくです。というのも情熱による有為転変は、出来る限りそれらの観念がつきまとい、少なくとも各々の筋肉の力や肉体の状態に依存し、出来る範囲で各々が他のものを歪曲しています。それは混沌（カオス）であり、機械的な力の噴出です。そして、それは私たちの裡のことです。〈宿命〉という観念がここでは相応しい題材になるのが分かります、何故ならそれは曖昧でない題材によって私たちの裡に法則が示されている盲目の自然であるからです。この観念を明らかにするためには、神経的発作への適用と共に思考することが有益であり、それは明らかに荒れ狂った暴力であり、決まりもなければ終わりもありません。従って暴力は、判断を決定するために取られた決心ではありません。それは何よりも私たちの肉体の内部状態であり、次々に行為へ戻って行き、まるで強く引っ張られた発条仕掛けの装置が、何かの機械的状况でついに外部へ動くようなものです。そこからは復讐の快樂に関する主要なものも由来し、全く奇妙でそれらの合理的なものの全て、思い出の全て、それに伴うもので余り重要でない結果でしかない呪いの全てを良く理解しなければなりません。復讐することとは、待つ行為を生むことであり、体の状態によって示され、そしてそれは筋肉を辛い収縮から解放することです。それは自由です、というのも行為が辛いものであっても、情熱的に待つことを行うので人生を圧殺しないからです。そして、この激しい快樂が既に或る種の抗い難い〈宿命〉を証明していて、私たちの行為を待ち、そして直ぐに報いるのに気付かされます。情熱的犯罪の歴史とはその様なものです。戦争は本当に情熱的犯罪です。言葉は重要でないということが言われます。それは本当のことです。しかし、それは事物の一般的秩序の中で、最終的には戦争に這入り込ませるための勧誘です。そこから何時も犯罪のように恐れられ、避けられることを人はもう一度引き寄せますし、怒りも同じです。情熱による最高の結果とか、少なくとも活発な情動の感情を、もっと注意深く考察して、多数の人命を奪う怒りのこの恐ろしい危機にびっくりしない欲しいと私は思います。そして特に、死の恐怖が戦争を防ぐことは決してないと理解しても最早びっくりしないでしょうし、死刑とか恐ろしい後悔や殆ど確実に自殺することが分かっている、恋敵とか愛人を殺す嫉妬した男を止められないと理解しても最早びっくりしないでしょう。同様に強い印象を与える類似のことも問題を明らかにして、非常に弱くて役立たない抽象的な理性というものから精神を変えねばなりませんし、それらによって戦争行為を人は説明しようとし、ここにいけば全てがあり、私たちが機械的な原因に関係があればある程、機械的な原因を神とか人間とかのあらゆる思考や計画から分断しますし、同様に雷に向かう避雷針のようにそれらに働きかけ得るのです。

権力者たちに対しての呪いは何の価値もありません、何故ならそれは既に戦争であり熱狂であるからで、自分自身に満足しているからです。権力者たちは上手に無視します。冷静な理性による最も弱い閃光は、彼らをぎょっとさせます。しかし、それが何になるのでしょうか、古代ローマの剣闘士は、絶望して何に飛び上がるのでしょうか。戦闘中は隊長や無慈悲な観客に対する激しい怒りがありますが、誰がそれを知り得るのでしょうか。その剣闘士は多分、シーザーを殺すことを信じ思い描きました。情熱は活動に耽るものであり、対象を嘲笑します。

(完)

情熱の中の宿命
(DE LA FATALITÉ DANS LES PASSIONS)
1916年3月13日

〈宿命〉という根本的な観念を、今ここで論じることは無駄ではありません。私たちはこれからやろうとすること、やらない筈がないことの予感とか活発な感情によって如何に〈宿命〉が現れるのかを、恐らくこれからもっと良く見ることになります。そして、そこから幾つもの原因によって、これから起こるであろう行動の単純で純粋な予想からこの種の眩暈を識別しなければなりません。もし私たちが、戦争や共同の行動や共同の予想と同様に怒りとか罪を幾つもの原因によってこの様に予感するようになるなら、私たちは今起きるようにそれらの原因を変えたり、その様な結果を避けたりするようになります。かくして一人ひとりを通りを横切る時、沢山の危険を逃れます。しかし、危険な行為が私たちの裡にも前兆を示しています、いや寧ろ私たちの裡だけとか私たちの同胞の中だけに前兆を示す時は全く別です。その時私たちは冷たい結果を否定することを明示します、それは少なくとも可能ですが、或る種の頑固な意志は幾つもの原因を無視して自分の目的へ向かって行きます。何ものかに用心深くさ迷う考察は、既に情熱を押し潰す絶望しか齎しませんし、それを実現させます。この観念しか見ない者は情熱というものの底にいて、流行に従って話す代わりに情熱によるロマン主義ということを使うでしょう。そうです、思考の中で考察されてさ迷うその考えが混合すればする程、その情熱は私たちの情熱に対して何も出来ず、それと同じ観念以外の何ものでもありません。そして同様に、私の問題にもこの観念を適用して戦争を避けるために、私たちが何も出来ないこの観念と別のものを兵士の精神も殆ど持っていないと私は言います。この陰鬱な瞑想はそれ自体によって熱狂し絶望します。それは他人を殺し、自己を殺す殺人者です。

(完)

狂人たち

(DES FOUS)

1916年3月14日

戦争は避けられなかったと或る人が私に主張する時、そして私は彼が直ぐに熱狂するまでに生き生きしているのを見る時、彼が戦争を愛していて戦争がないことを望んでいないのを私は非難することになります。或る人は何かのことで私に答えました。「私が戦争は避けられないものと見做しているけど、戦争を望んでいると結論付けてはならない」。知ることです。言葉は何時も間違ったことを言う、と知ることです。彼には、戦争は予想するのが恐ろしく、見るのも恐ろしいのです。しかし、真の悲観主義者は何時も宿命論者でもあり、或る意味で予言することを望んでいます。あるいは、もし人が望むとするなら、確信を持った恐れは短気にさせると言われます。かくして死の恐怖によって自殺するかもしれませんし、病気の恐怖によって執拗に病人になりたいと思うかもしれません。同様に多分それはもっと胸を打つことですが、狂人に成るという恐怖は確信が加わり、もし話がその様に出来るなら、事物という悲喜劇的印象によって事件に先行する意志的な或る種の狂気を引き起こします。私はこのたっぴりある材料から十分に論じようとは思いません。知識というものは思い出すものであり、何らかの意味で私が狂気は肉体と病気によるメカニズムであると言うことが出来て、狂気は悪意との承諾であると言いたいのを、恐らく人は理解出来るようになります。その上でバルザックの『谷間の百合』を読むとか再読して下さい。モルソー伯爵の習作は、真の人類学の美しい一章です。そして、その様に考察された狂気というものは、情熱を荒々しく明らかにしています。しかし、その生き生きとした光は眼を慣らしたがりません。多分、読者は〈宿命〉の観念を面と向かって考えながら、この困難な小径の導かれて進み、人がそれを形にするや否や不幸を齎し、もしそれに耐えるなら精神は致命的になります。そして非常に驚くべき類似に気を付けて下さい。同様にもし戦争を避けられなくするのに協力したくないなら、避けられるものとして考えなければなりませんし、同様にもし痙攣を起こすことが多かたり予言する精神であったりする傾向を阻止したかったなら、狂気に関しては理念を持たなければなりません。〈不幸の予言者〉の表現は、同じ意味の言葉を繰り返して使用する冗語法の力を持っていることにも人は気付きます。もしそれらを余りに適用し続けたなら、恐らくそれらの見方は宿命論として余りに有名な結果を結局は説明しているのであり、それから彼の本来の思考に決して従いたくない人への激昂であると私は言いたいのです。その様にして私は決して自分の主題を見失わなかったことははっきりしています。というのも長い行程の後で、私はその様にして手に入れた宗教は何時も戦争であり、戦争というものが宗教であるというこの結論を私は再発見するからです。戦争を予言してから人は徐々に眩暈によって戦争を望んで行うように追い込まれるのであると理解して下さい。宿命よ、地獄の門よ。

(完)

運命の呼びかけ
(L'APPEL DU DESTIN)
1916年3月26日

私が証明の助けを頻繁に求めたのは哲学者よりも小説家で、取分け何かを証明する意図のない小説家でした。私たちが認識していると思っている運命やぞっとさせられる行為に至らしめるこの眩暈について、理解に苦しむ作品であるポール・クローデルの「人質」を私はあなたに読んで欲しいと思います、何故なら、高貴な娘がひどく嫌いな男の腕に飛び込むまで、軽率な女のように献身的に努める理由を人は理解したことがなかったからです。この作品を注意深く読んで、身を捧げる淵を探している不可思議な男女であるいとこの二人を、私はあなたに良く理解するようにお願いします。彼らは珍しい存在であることを私は認めますし、恐らく空想上の二人ですが、俗悪と言われる魂を理解するのに役立つことが出来ます。でも俗悪な人間は決しておりません。人間は誰もが高貴であり、王であり、裁くことを望む精神とそれを引き出す貴族になる情熱によって、シシリー島の王マンフレッドになります。ロマン主義の概念にはこの真実があり、人間の平安や健全な生活を疑い信用しません。人が告白することよりもっと重要な夢を何時も語ることがなければ、出来の悪い絵画を掛けるのを決して止めない情熱による幻影になります。不幸への誘いがあり、それに対して慎重さがまさしく武装して身を守るに違いありません。それは〈精神〉が全てを忘れるのを望んでいる間、肉体は全てを記録したがります。要するに、海上のさざ波のように自然の出来事としての豊かな印象を身に付ける代わりに、私たちはあらゆるものが一つの意味を持っているのを望んでいます。それ故に何も意味せず、何も示さない千の原因によって千の方法で各瞬間に変えられる人間の肉体の構造について、絶えず考え続けることは悪くありません。古典主義と言われる芸術も何かに向かっていて、音楽とか詩があり、最も狂った空想力を精神が固定して閉じ込める正確な構想よりも不正確な反響を気にしません。そして、その様式は多分そこから定義されるようになります。しかし、全生涯にも様式はなければなりませんし、それは全てを言うために十分に構成された偉大なる静けさであり、そしてもう少し礼儀正しいものです。もしドイツ人の精神を判断したいと思うなら、そこから考察して理解することです。

(次章へ続く)

情熱によるお決まりの性格
(DU CARACTÈRE RITUEL DES PASSIONS)
1916年3月27日

社会学者たちは情熱を教義の中に入れます、何故なら彼らは情熱という教義を認めないからです。情熱的な演説というものに従って外部の力が市民に苦痛や喜びやそれに応える行動を強いることは、まさしく社会学的神学を生み出します。私は何でも大変有名な作品をあなたに参照させますし、更にお手本になる多くのものがあなたを教育してくれます。冒頭の言葉が間違いだと理解したなら、私の考えによるここでの論争は全て無駄です。しかし私は、情熱が特に対象によって共通すれば、伝統や崇拜するものとして私たちに齎すように見えるのは容易に説明出来ると強調しなければなりません。そのことは一般的な確かな情熱を何も明らかにしていません。情熱というものは、言語の共有によって形式においても共通していて、熱狂者が自分自身のために演じる悲劇を先ず強制します。同様に演説で言うあらゆる出来事というのも、いわゆる助手によって俳優に台詞を小声で教えているようなものででっち上げです。特に文学の良し悪しにおいて、良い文学は少人数の観客によって行うのであって、彼らがけちとか嫉妬深いとか野心家とか博打好きとか酔っ払いとか放蕩家である時に、働きかけて自問したりすることの文化に従って決定します。私はこの大きな主題を探求することの面倒を読者に委ねます。名誉を重んじる人間たちの喧嘩と仲直りがどのようにして細部にまで規定されているのかを思い出すことで私は十分であり、そして若者たちが取分け細心に伝統に順応しているのと同じです。如何に好戦的な情熱を表す決まり文句を形づくり統一して保存されるのかを説明するために、最早言う必要はありません。そして一人ひとり、これらの儀式が如何にして情熱の模倣を規定して強固にするのかを容易に理解することが出来ます。そこからの世論活動は殆ど不可能で、何時も直接的な攻撃によって碎かれます。そして世論のこの力は〈宿命〉という顔つきの一つで、多くの口によってここで話され、多くの拳で屢々説得しています。精神の力だけがここでこれらの問題の全てであるように、この大きなメカニズムを基本要素に連れ戻します。しかし、人はここで機械化された偏見に用心しているのです。この群衆の活動を筋肉の動きの総和に帰する者は、自由に原則を逃れています。もう一度彼は精神や思考の力の中に入りますが、錯乱していて、情熱は情熱になるということです。そして、神々は多くが現実です。それらは肉と血による誤りです。神々は確かに見え、聖トマスは神々に触れたのであり、私はそれを信じます。私にとっては怒りとか恐怖よりも触れるものはもう何もありません。そして、夢よりももっと強い印象を与えるものです。従ってトロイア戦争時のギリシアの英雄アイアスは〈神〉に触れて自信を持った如く、市民は社会全体によって受け取られて引っ張られて運ばれていると感じています。そして、彼の触れているという感覚はそこでは何も実感されないと断言しているのは、大変に面白いことです。私は自分の肉体そのものを大変に生き生きと触れて感じますし、全てが肉体を通していますが、そのことを私は疑うことはなく、花を見る子供が網膜のこの僅かな動きに疑問を持つこともありません。その視覚理論は最も優れたものでした。情熱の理念もその続きです。そして、全てのことが深く隠され、情熱は更にもっと隠されます。というのも彼は自分の夢を愛しているからです。同様に私もこの企ての困難さから弱い観念を作りません。私がよじ登っているのはゼウスの宮殿があるオリンポス山です。

(完)

情熱の模倣
(DE L'IMITATION DES PASSIONS)
1916年3月15日

私は情熱の模倣を簡潔にすっきりと論じることが出来ます、というのもその点について誰も多くの本を読んでいないからです。不安や恐怖や失望は、自然な表情の中のたった一つだけの表情で、話をしなくても人から人へ移るのは誰でも良く知っています。そして確かに、理性の働きや体験はそこに何かを可能にしています。兵士たちが道の土手に向かって避難するのを見る時も、そこに身を置くことが賢いのです。そのことは道を遠回りしても、もし私が恐れていると理解すれば恐れる方へ導き、期待していると理解すれば期待する方へ導きますし、安心していると理解すればもっと伸び伸びと安心する方へ導きます。しかし、私は情熱を模倣することによって全く機械的な何ものかを理解しますし、それは情熱的になる寸前には決して常識を受け入れません。私たちの肉体も隣人と同じ状態になります。そして、それはあくびをするまでになりますし、ご存知のようにそれは伝染しますが、他の人があくびをしたと気付くことさえありません。原因を探すのは止めましょう。ここには何か曖昧なものがあり、スピノザの『倫理学（エチカ）』の有名な命題も完全に一掃されて明らかにしていません。この情熱の模倣が純粋に機械的に期待させ、恐れさせ、愛させ、憎ませることがあり得る原因についての判断そのものに先行するなら、自然に考えるのが重要であるということです。そして、その伝染が信用されなくなるや否や、大変に恐ろしいことになるしかありません。その危険は特に予め既にその気になっている者たちにありますが、それ程危険ではありません、何故なら彼らは退屈や平凡な人生に対しての方策を他人の情動に見出しているからです、というのも有力な証拠に代わって彼らは情熱の模倣を身に付けるからです。従って、例えば大衆の一人の人間は雄弁による魔法によって興奮して、雄弁家の理屈がまさしく明白であると内心から信じます。同様に、肉体的な容姿に憂鬱になっている人も、悲しいことに十分な論拠があると内心から信じています。そしてもう一度言いますが、情熱が恐ろしいのは精神の入口になるからです。肉体の中や行動においても、情熱は大したことが出来なくても飛び上がって激発しますし、その意味で人々の中には情熱による犯罪、暴力沙汰、決闘、戦争への恐れが何時もあると私は思います。しかし、これらの中での最もひどい悪は、それらの間違いを崇拜することです。そして暴力に限らず、それは私がこの頁に書く情熱による恐ろしさが最悪なのです。精神は警棒ではありません。

(完)

もっと自由な考察
(RÉFLEXIONS PLUS LIBRES)
1916年3月16日

私は最近の章において大変厳格な一連の考察を続けました。時々はやらねばならないことです。しかし藪を叩いて徹底的に探すことも悪くはありません。私は今朝、私の友人である何人かの人間のことを考えました、そして彼らは、若者の虐殺というものを人が悼むのに我慢がなりません。最初の頃、私はこれらの人間を意地悪と思いましたし、彼らと共に私は戦争に行くことになります。しかしその考えは最初の動きを直ぐに私が書いた原因というものに戻しますし、同時に彼が思考の代わりに身に付けた殆ど残酷な情熱も私は理解しています。私は良い意味で彼らよりも軍人です。私自身の中に心の底から悪意は無いと認めることが出来ないとしても、愛の情熱とか政治的情熱によって打ち傷をつける衝動を何回もよく感じますし、力強く生きたと私は言うに違いありません。それ故に私は戦場にいました。しかしながら私は何時も平和を愛しましたし、今でも愛しています。私は暴力を何時も憎みましたし、今も憎んでおり、正義も同じです。その理論を明らかにすることは、ここで私のことを話すためには非常に印象深いように思われました。もし私が私自身で他人を判断するなら、公平さしかありませんし、突然の動きには悪があり、平凡であろうとすると善があるのは本当のことです。しかし、その相違は何処にあるのでしょうか。後者においては根拠の無い偶然の出来事によって私の性格を言うことについて、私は何も言いませんでした。私は、見えない力が私を押しているという感情を敢えて持とうと思わなかったのではなく、私にはなかったのです。眼に見えないのではなくて、反対に大変に明らかであり、人間の体が作られるのに倣っているのです。何をでしょうか。多くの人々のように一回の咳で私が腹を立て、更にもっと咳をしながら病気を追い払いたいと思ったとしても、私はそんなに馬鹿ではないのでしょうか。些細なことでも怒りや恐怖や不安や悲しみや疑いを抱くには十分です。しかし、私はこれらの動物的な活動を決して注目しません。それらの言葉も決して聞きません。その方法によって痙攣している女予言者たちによって言われることを多く理解するのを恐れて、私は決して多くを聞きません。それは街路清掃人夫の話にある罵りのようなものです。しかし、その中には多くの喜劇もあり、その喜劇には大変に明白なメカニズムがあります。私は喜劇役者のあなたを笑います。その全てを見捨てなければなりません。そして、いったん筋肉が暴動を起こすと、私自身の話は大変に雄弁になり感動的になりますが、私はそれらを決して信じませんし、忘れます。宣誓でもなく、宣告でもありません。しかし、私が考える人々は彼ら固有の情熱について多く沈思黙考しますが、その原因については不十分です。従って正確に話すなら、彼らは肉体と共に思考します。そして、動物機械のデカルトは大変に奥深い何かを聞きましたし、それは思考を模倣する表現力に富んだこれらの活動を、先ず拒絶しなければならないことです。そうです、自分の道に従って行く野兎とか、それを追い駆けて行く犬よりも、情熱の活動には最早思考はないのです。

(完)

感情の美
(BAUTÉ DU SENTIMENT)
1916年3月17日

美しい狂気には、さようならを言わなければなりません。従って、恋の病に癒えたと思う時に話して下さい。しかし、少なくとも事物や人間を精神的に見ることによって、深くて広大な感情があることを私は示したいと思います。私は反論もよく予想します。何時も冷静な理性と明晰な観念です。しかし、私は他のものを望みます。私がデカルトを引用する時は、デカルトの学説で判断したいということではありません。そして、私は余り奥深く理解していなかったこともあり得ます。それは別のものでした。私としては口論するのはデカルトに任せて、思考は肉体への愛を模範にしたくないということを私は少なくとも言います。しかしそこから思考が、幾何学とか物理学へ追い込まれると私は理解しません。私が〈思考〉の中の〈思考〉をもっと見ることは、〈必然性〉の否定です。それは〈宿命〉を否定することです。もし人が望むなら、それは〈希望〉ですし、真の〈勇氣〉であり、彼にとって機械的な事柄は手段や道具に過ぎません。そこからは喜びも感動も愛もないということであり、もし短い期間でも社会主義者とか革命家で、あるいはその様な何者かであったとしても、誰もそんなことを信じないということであり、如何なる憎しみもありません。これらの感情は共通しています。しかし、彼らは精神の弱さによって瞬間的にしか輝きませんし、私が見た限り彼らは海の中のように、希望という宝物と共に必要性に直ぐに身を投じます。私は今は先に始めます。私の計画は少なくとも深さと広がり情熱の美しさを測ることでした、というのも激しい怒りが愛されているのと同様に、私たちは情熱が愛されていると全然知りませんし、情熱が私たちに置いて行くのは憂鬱であり、人が狂い過ぎた時の後悔です。私の肉体の身震いは、私に関係していません。しかし、それで何かの病気を心配しないで下さい。私は要約されたこの世を尋ねますし、寄せ集められた世界の豊かさの全てを尋ねます。その次にそれらのものを分散させて帰さなければなりませんし、〈世界〉の全体を思考しなければなりません。それらの歴史の中の情熱は何時もそこに来ますが、最高の瞬間において私たちは大変豊かになります。予感と呼びかけであり、私たちの非常に近くに未来があります。何か準備されます。私は一瞬の間にその全てを手にし、何故なら、私たちはこれから起きることを行うことを同時に知覚するのであり、予感と同じメカニズムの中にあって十分に根拠があります。この目覚めには恐怖がありますが、その上更に自分や全てのものへの強い愛があります。その生活は張られた弓のように、最高の瞬間に生活そのものを味わいます。詩人という弓は、この感情を繰り返すとか、継続させることです。そして何年も後でもう一度思い出して楽しむまで、夢見ることが出来るのを誰もが知っています。〈世界〉とは、受精卵から出て形を作り始めることです。これらの誕生したものは美の中の美です。その様にして平和の時には戦争への夢があり、そして戦争の時も同じで、多くの人々にとってはこの様にして退屈が癒えるようになり、若い時の心を思い出します。しかし、元気に起床する者には次のように言います。「私はここにいる」。最早、夢見ることはありません。行動、知覚そしてもう一度行動です。私は読者に辛い考えを無理強いしたくありません。この演劇において役者たちが何処で大変な苦痛を確実に持ち、観客たちも余り喜んでいないかを読者は自分自身で慎重に試しているのです。それ故に地上のヴィーナスよ、プラトンが話すように、永遠にさようなら。

(完)

平和を愛する者たちの幻想
(DE QUELQUES ILLUSIONS DES AMIS DE LA PAIX)
1916年3月18日

私は平和主義者であったかどうか一度ならず尋ねられました。この不正確な言葉を人々は理解することが出来ても、確かに私は何も分かりません。私は平和を愛し戦争を憎むとあなたに言うとしても、平和を愛する人たちが彼ら自身で満場一致で戦争を起こしたこと、もっと正確に言うならそれを望んで情熱に率直に委ねて仕舞ったことが私には良く分かりません。彼らは情熱によっても平和を愛することを私に分からせてくれます。そして、美しかった時よりも情熱をもう当てにしないで下さい。戦争よりも平和が好きなのは誰にも共通した考えです。私は狂信者たちに期待していません。情熱の沈黙の中でどんな人間も愛とか嫉妬による犯罪を嘆くのと同じで、そして恋人や嫉妬深い人や殺人者に決してならないとは言いたくありません。同様にこの賢明な平和主義者が情熱による最高の活動に混乱され始めているのも私たちは眼にします。あるいはもっと正確に言うなら、情熱は他のものに取り替えられたのであり、理性は欠如していませんでした。理性は決して情熱に欠けていませんし、情熱は熱狂者やその他の者たちのために理性を大変明白にします。平和を愛することは、それ故に戦争と余り反対のことではありません。そして、私は何故法律的な協定を余り当てにしないのかを十分に理解させられました。怒りに達すると、体面や名誉が何時も話されます。

そして私はそこで結果として、良く反論して答える立場にいますが、百回以上も私は聞いたことです。「戦争は避けられると十分に信じることが出来るなら、最早武装しないだろう」と私は言われます。しかし、近くばかりを見ないで下さい、私が言うことも良く考えて下さい。私が言ったように、戦争は避けられないという考えは非常に危険です。しかし、戦争はあり得ないという考えも、協定によるにしろ和らいだ態度からにしろ私の眼からは危険に見えますし、同じく根拠になりません。戦争は何時も起こり得るし、そして避けられないということを私は断言します。情熱が駆け出すことさえなければ、批判的な場合には紛争を避けることが出来る私は信じています。更にもっと正確に言うなら、情熱による長い不信があっても市民や政府の裡で穏やかな間は、際限なく平和を確実なものに出来ると私は信じます。しかしそれに反して、もし平和という共通の望みや制度だけを当てにするなら、私たちが通って来たもののように何時も人間的な激情の嵐へ感謝し続けることになると思います。そうです、軍備が縮小されて、民軍がその代わりに制度化される時は、五〇年程前から行われて来たように情熱を熱愛したならば、戦争を止められません。そして私が言った理由によって、それが未来の多くを変えることが出来ると私は信じません。文明の段階で受け入れた観念で穏やかな習慣は、そこでは何も行いません。私たちが保有している道德の最も高い観念でそれ自体が平和主義の観念は、ご存知のように戦争状態に簡単に適応します。そして同様に、社会主義者の夢想も適応しますし、アナキストのユートピアも適応します。私は何でもやるこの観念を信用しません。「人間が情熱を持たないのは可能ではない」。このスピノザの命題は、何時も私たちの現実としてあるに違いありません。私はそれ故に人が武装して訓練するのを悪と思いません。賢明な意志を前にして、十分にこの準備を推進出来ると私は断言しますし、如何なる狂信もありません。狂信を必要とするのは、モルヒネとは別物であっても病人たちであり、恐らく老人たちも同じで必要としています。弱い新兵たちも同じです。武装化は、武装することが確実な方法になり、それだけで戦争の原因になることは少ないのです。これらの説明に従ってここで私が結論として言いたいことは、この素晴らしい提案を私が考えていることをはっきりと人々が理解することです。「私たちの勝利でこの戦争は最後の戦争になるだろう」。

(完)

同主題についての解明
(QUELQUES ÉCLAIRCISSEMENTS SUR LE MÊME SUJET)
1916年3月19日

もし戦争の原因は常に情熱的な痙攣と私が言っていることが正しければ、平和にとって大変に危険で非常に共通した世論を今は点検しても良いでしょう。先ずこの戦争は最後の戦争になるということ、そして次に同じことを言うのに他にも方法があり、この戦争が権利と正義のためであり、未開の野蛮に反対するものであります。これらの二つの主張を私が調査無しでは認めないことを人は驚くことでしょう。それは正しいと驚いて下さい。その同意は私たちには大変に高いものにつきました。悲しいかな、死者たちよりも高いものにつきました、何故なら私たちは一つの観念を与えたくなかったからです。独りで思考することよりも辛いものは、もう何もありません。しかし、先ずは何時も独りで思考しなければなりません。

この戦争は最後の戦争であると言っている者たちを私は、次の様に言っている人に例えます。「私が怒り出すのはこれが最後である」。もし彼が自分自身で行動を慎むなら、そう言うのは恐らく本当です、というのも怒りは怒る前や始まる前には何時も結構穏やかにいられるからです。勿論です。何故なら平静で和らいでいる自分を感じるからで、そして疲れて言う代わりに動物的性質を当てにして、彼は再び一度ならず言います、「怒るのは本当に最後だ」。

私は戦争を家庭の喧嘩と比べて仕舞います。家庭の喧嘩は些細なことで起こり、理性的にならないと大変に長く尾を引くことになります。だがその上更に、慎重さと忍耐が小さいと全生涯に亘って排除することが可能になります。戦争もその様なもので、何時も脅威があります。しかし、良く目覚めた良識が何時も長い平和を維持出来るようにします。一番大きな危険は、これからは平和であると言われていし協定もあるからと断言して、まさしく信じていることです。同様に争いになれば、約束は全てが無駄になります。情熱は直ぐにそして適切な薬を望みます。私はその点の平和主義者の間違いを既に指摘しました。しかし、あなたは気づき始めているのでしょうか。

戦争は情熱による行為です。怒りの唸り声や痙攣的活動によって前兆が現れます。暴力沙汰が野蛮な闘争に変わるように、次々に長く続きます。というのも精神的締付けというものが怒らせて、相手に従わないで攻撃したり受けたりするからです。それ故に私は屢々言いました、「この戦争は疲労してうんざりするか理性に目覚めて終わりますが、戦争が実現させたもので終わることはありません」。

(完)

市民の義務
(DES DEVOIRS DU CITOYEN)
1916年4月11日

平和には戦争が何時もありましたし、従ってこれからも何時もあると結論付けることが出来る、とその友人は時々人から言われています。この理屈は、批判するのが難しくありません。しかし、私は少なくとも思いつきの主張であると考えたいのです。実際に私たちの土地、取分けヨーロッパには戦争がありました。現代と似た様な戦争は非常に少ないのです。野蛮な戦争がありました。そこでは力が強くて武装した国民が、優しいとか無知な国民を思う儘に服従させていました。同一家系の戦争もありましたが、そこでは金で雇われた傭兵同士で戦っていました。例えばジャンヌ・ダルクの時代には、今日の虐殺に似たものは何も無かったと言わねばなりません。それ故にもし言葉に気を取られずにそれらの違いを見たいならば、戦争はこの世界では要するに新しい事である、と反対に言わねばなりません。戦争は、自由を手に入れると生まれるのであり、全ての市民を戦場へ投げ込みました。それは現実的な科学の発見同様に、サラリーマンになった母親のように権利という理論上の平等と結びついた産業の進歩そのものによって大きくなりました。既に私たちは述べましたが、これは全く昔の未開社会から生まれたものではありません。寧ろ文明化された特有の病気で、十分な治療対策も無かった病気ですが、ハンセン氏病やコレラやペストに対して行ったように治さなければなりません。これらの指摘によって、大変良く耳にした理性の働きによる極端な弱さを人は見ますが、それは私が前述して言ったことです。

これらの大変に明白な考察は、それを取るに足りないものにする別のものへ私を導きます。憲章は再検討すべきであると私は思い切って言いたいのです。市民の義務は現代の戦争の脅威によって、私たちの観念に平静さが許されないまでに広がっているように私には見えます。何故なら私たちは、市民が権力に十分抵抗する観念の上での平和な時代に生活しているからです。しかし、政府は金持ちへの課税対策、自由貿易の制限、労働者の力の組織化への制限を躊躇しない訳ではありません。そして、外国の政府が問題になる時、取分け軍備に基づく時、市民は白紙委任や生活さえも要求され、抵抗する権利は一瞬たりとも許されません。ネクタイ屋は同業組合を首尾良く作り、発言力を強くします。それと同じ人間が真っ先に署名して、塹壕を掘り、財産も健康も生活も与えて、屢々出し惜しむ者たちを罵ります。何についてもその時、彼は自分の国の力のことを考えて言うのは手に余ります。というのは戦争がもし希望と引き替えに終わるなら、その意味では間違いになり得るからです。ですから市民は、統治者たちの指針の細部を戦争中でさえ良く調べなければなりませんし、それを保持していなければなりません。税金に反対する同盟が作られるや否や、市民は大変活発には手を付けませんので、国の高度な利益に頼っているように私には思えます。従って普通の市民の関心は、お金よりも血縁に良く現れます。そしてもう一度言いますが、それは情熱への賭けや軍隊の力のメカニズムによってしか説明出来ません。そして、正当な力や世論の力という権力が、如何にしてあらゆることに大変な制限を設けて復讐しているかを私は十分に示しました。ルイ十四世は残虐な戦争に市民全体を投げ入れるこの権力をずっと持っていなかった、と私には見えます。そして恐らく当時の将軍は誰も、権力への信頼や服従という民主主義の習慣により今の一伍長が持っているものと同じ様な兵士への権力を持っていませんでした。政治的自由による予見出来ない奇妙な結果です。そして、確かに私は服従する義務を良く理解していますし、価値ある証拠をそこに与えました。この服従も、反対を愛する国民の裡では精神になるとしか私は理解出来ません。私が示したような情熱の分析によるのでなければ、理解出来ません。要するに私は、現代の戦争がリシュリューの元での決闘の熱狂と似ているのであり、結局のところ最早驚きは無く、一人ひとりが今日自分を気高いと感じているのに凡そ似ています。そして、当時は彼ら自身に反対する律儀な貴族たちを守るための効果が強い薬がなければならなかったように、現代にあってはこの好戦的な病気に対しても、もしリシュリューの法

令を余り当てにしなかったなら、黙考する活動に少なくとも私は期待していますし、孤独になったの良心による何らかの吟味や、無謀な者たちへ何らかの懲罰を与える考えに期待しています。

(完)

この戦争は新しい出来事です
(QUE CETTE GUERRE EST UN FAIT NOUVEAU)
1916年5月9日

私は一番重要な観念に戻りますが、それはこの戦争には名称以外に共通しているものは何も無いということです。私はフランスの戦争や、特にドイツの戦争を考えます。私が観念や感情そして結局のところ精神によって一番最初に二つの国が身を任せて信じていることは最初の例になるでしょうし、それは恐らく唯一のもので驚くべき痙攣であり、如何なる前例もありません。

そうです、私が言ったことや書き残している国民の自由のための〈革命〉による戦争はもう同じ種類のものでしたし、野蛮人とか王朝の戦争とは全く違います。その中には僅かに真実がありますが、厳密ではありません。そこには命を捧げる動機があります。注意深く考えて見るなら、私は今を見ていないのです。そうです、私は今、純粋な状態の戦争や暴力を見出します。痙攣それだけであり、熱狂それだけです。少なくとも私が言った動機から見出します。それは恐怖であり、魂そのものだけの力であり、それは魂を疑う力であり、平和に退屈し、軽蔑を恐れ、そして結局は証拠を示したいのです。誰に対してでしょうか。最も似た人に対してです。他人に対してですが、その人も同じことを感じて考えます。この戦争は〈思考〉の間違いです。その間違いが治るかどうかが、人は大いに期待することになります。

そうです、この戦争は新しく前代未聞ですが、それは義務の延長であり、承諾し満場一致によるものです。同様に真のリーダーや野心ある人や長身の悪人もいないからであり、見逃してきたからです。本当の計画も無いことにより、観念や頭脳の狂気により、恐怖や崇拜や無為に打ちのめされた市民精神の茫然自失により、恐怖の兄弟である希望の喪失により見逃して来たからです。

ライン川の兩岸には多分、余りに勤勉で凝りすぎた思想があったのです。穏健さの無い精神です。無宗教です。思い上がった自我であり、この世にいる人間の孤独です。それは間違いのようなものです。余りに高くなります。余りに冷笑的で高慢で、贅沢な意味においては思い上がっています。そして独特な意味で、伝統的な産業風土や言語によって表現されるのですが、そんなことはどうでも良いことです。一方では無礼であり、他方では術学的ですが、私の眼には美しく巨大な術学趣味で、更により見事な無礼があります、何故なら私はそれを愛しており、私にもあるからです。何故ならそれは私が死ぬことを最良と受け入れることよりも、恐らくその方が良いでしょう。二つは大きくなり、お互いに対立し、殴り合いになります。見世物にはならない光景ですが、国民は模倣し、売春屋や折句詩人のためにはなりません。しかし、災難は避けられませんでした。戦争の核心である敏感な点を把握せねばなりません。人々はそのには縁がありませんでした。脅威にさらされてもそんなに調べませんが、観客は期待しています。

ヘーゲルは驚くべき素描を残しました。精神による精神の再認です。それは一瞬のことです。戦闘もそこから直ぐに生じます。この規律ある思想家には占者がおります。恐らく精神の陶醉や本質の相違をもっと良く見さえすれば良く、思考させられることと力強いことを乖離させるのは不可能です。そして、足枷を付けられたこの女神ミネルヴァは隷属を切って、戦争に身を置いているかの如くです。かくして事の本質によって二つの社会主義もお互いに胸ぐらを掴んでいなければなりません。軽蔑されないようにして結局は全てが許されるために、その点についても熟考されなければなりません。

しかし、私は訓練される儘です。私は戦争と名付けているものを悪と呼び、平和論と名付けて終わっているのも悪と呼ぶ結論に至って欲しかったです。そして、これらの事柄の管理者たちは語彙や態度や道徳に何も見出しませんでしたし、新しい状況が気に入っているようです。この時代の殆ど全ての作家たちの愚かさが、余りに明白なものもそこから由来しており、理解されています。フランソワ一世と英国のヘンリー八世が会見した金欄の陣のやり方で、これらの事を導い

て終わりにするように人々は努めます。昔の薬は、そこで何も出来ませんでした。しかし、その〈本質〉は生成し、実際の原因に従って働いています。死ぬか回復するかしなければなりません。そして、私たちは回復することが私には分かります。超越的な精神でなくても本質に内在する精神は、毒殺者の後を追う医者になるでしょう。

(完)

新聞
(DES JOURNAUX)
1916年4月17日

想像力という幻影の見本を、この戦争時期の新聞に見出すのは大変に容易です。私は、この仕事を行うのを読者に任せます。やむを得ない嘘、つまり命令によってついた気休めの間違いを行う役割を一端担うと、興奮し高揚させられた想像力の意見によって多くが取り残されます。人々の心の裡にも、行動する役割が与えられました。そして全く素直に、何の情熱の力も無く、快い確信に対して何の疑念もありませんでした。昔気質の政治家は疑念を学びました。しかし、現代の制度における指導者たちは信じられない位に率直で、彼らの言うことを聞くか読む者たちは彼らがあらゆる人々の望みを現実に整えることを殆ど称賛します。毅然とした規律は最も教養ある人々にも大変に欠けていたことを、詰まらない人間は何も分からせてくれません。思想は余りに楽しい遊びと見做されていました。これが長い間、私たちが楽しんできた愛すべき自由の結果です。私はこの戦争の準備や指揮において、このことを最も重大な結果として少なくともここに指摘したいと思います。情熱は何時も方法よりも寧ろ結果を考えます。その欲望が飛び上がるのは最後であり、肉体はそれについて行くために翼があるように見えます。要するに強く希望を持つことと大きな飛躍が勝利を呼ぶと大変信じられていましたし、まるで雲間に隠れていた神がついに志と熱狂と犠牲精神に冠を与えに行ったかのようです。しかし、私たちは希望を実現させるためにざらざらしたこの世に来ていますし、少なくとも忍耐強く産業を大切にしています。全てがまるで、決して神がいなかったように順調に行きます。しかし、情熱的な想像力が至る所で神を思い出します。従って美德は、何時もこの美しい勇気が遂に運命を屈服させると信じながら、裸になって戦うことに幸福を預けます。運命に質問するように見えるこれらの狂った企てを見下ろしながら、〈宿命〉の矛盾をより良く分からせてくれるものは何も無く、そして物事の決定論から解放されて慎重で厳格な方法を要求する観念は何もありません。私たちの空想的なロマンティックな敵の裡にある感情は明白で、冷静な理性でより良く整えられているのが殆どであると私は言います。彼らは神秘主義者になる術を知っていて、何時も少しそうなっていて、陶醉が孤独の心に占めていると言われていました。その代わりに私たちの活発な感情は頭に昇って間違った理屈を粉飾します。あるいは多分、戦っている国民の澄んだ純真さは指導者たちにも同じ様にあるとするのは相応しくありません。要するに多くの人々は勇敢であることだけを気にして、恐ろしい決闘へ行くようにこの戦争へ行き、その他のことに関しては大変に神を当てにしていると私には見えます。私はここで決して不平を言いたくありません。少なくとも一人ひとりの不平は、白日の下にさらされるでしょう。それ故にもし出来事を嘆く代わりに理解したかったなら、出来事を明らかにしなければなりません。この検討によって一人ひとり信じるのを止めて、希望の道をより良く探すために自己を形成しますし、まるでその人はこの地球上で独りっきりになって、自分だけの産業を任せられたようです。もしこの厳しい修業が幾人かの人間の家で大変遠くへ連れて行かれたなら、何度も詳細に告げていた侵略者たちは不可侵の国境をその後を描き三倍の国境線の労働を見付けたように私には見えますが、それは当初の国境線からは大変に遠いように見えます。そして全て簡単に言おうとするなら、冷静に準備した多くの自衛の戦争を待つことが出来ますし、それは敵の軍隊を無視したり情熱に応じて減少させたりせずに待ちますが、寧ろそれ以上に兵力を評価して待ち、産業面での慎重な見方を模範として待ちます。この問題に関しては確かな解答があります。大変に広大な土地の長い国境を整備して武装することですが、如何なる軍隊が襲撃しても越えられない方法です。しかし、情熱家たちはこれらの技術者の計算や運用手段を支援しません。彼らは正直な性格と共に仕事への情熱以外のものを持ちません、私はそこで止まりますし、それは私が述べたことでもあります。非難や称賛に対しては一人ひとりが慎重さを鍛えることです。それが一つの平和への道です。

判断

(DU JUGEMENT)

1916年3月20日

前もって読まなくても良い様に、或る種のレジユメを各段階で作って置く意図は、私にはありません。注意深い読者は今、熱狂的な想像力で人物描写を行い、その人物の半分は野心、半分は遊びが表れていて、危険な斜面から深淵へ人々を投げ入れて運命を非難していると私は考えます。一人ひとりの人間は、多少なりともこの人間に似ています。もし余り鼻にかけないのでしたら、それだけでも大したものです。その上、熟考というものは短くても長く続いても、話の中に小さな変化を齎しますが、それを私は大いに期待しています。しかし、一人ひとりはそのために慎重になります。というのもそれらの助言は思想がなければ役に立たないからですが、思想があっても役に立ちません。

共和政体には危険がありますが、私はそれでも認めたいと思います。それは反対する古い精神から去るといことです。市民たちは、政府が市民に従属しているという虚構によって余りに政府寄り過ぎます。君主制がどんなに最良であっても、良識の基本に戻らなければなりません。どの様な主人も虚栄心が強く悪賢く、人から崇められると愚かになります。王様も例外ではなく、生の人間です。どんなに小さな称賛でも、その神を陶醉させます。それは忠実な盲人を利用出来ない人間としての悲しい条件の一つであり、犬の徳です。軽蔑も非常になおざりにされた一つの美德です。軽蔑の将軍は、真に自由な人間のリーダーです。私の意見と一致して、尊敬すべきと同意したリーダーたちでなければなりません。四本足の動物にお世辞を言うのではありません。1月1日の公務員たちの訪問はその点について私に教えてくれましたが、その時の私は未だ若かったのです。私には大変自然に喝采する意向がありましたし、信頼する気持ちもありました。しかし、私が公務員たちの列を見た時、立っているのが心配して仕舞う猿たちであったので地面に手をつける殆どその状態で、彼らと同じ様に平凡な郡長か誰かのために、私はこれを最後に自分に言いました。「昔の仲間よ、あなたは公務員の儘でいるのが私には分からない。どんな状況であろうと、あなたは職業的誠実さで幅広い義務も、厳格に服従する義務も決して忘れないで欲しいと私は思う。しかし、そこの人々のように決して挨拶しないことを私に誓ってくれ」。公務員たちは私を大目に見ているのです。私は彼らが余り愛していない彼ら自身の職業に反対して書きましたし、私は祖国に共通する人間一族には賛成して書き、そして私の気に入っているのは私が立派に尊敬していて、そのことを事件の前に予言したことであり、大変に恐るべき国民に対してすさまじい賭けをすることを覚えたことです。私は決してこの国民の肖像を描きませんし、空想的企てで如何なるものも書きません。しかし私は多分、余りに忘れられているフランスの顔だちをしっかりと描くのは気に入っています。もし言えるとするなら、友情への不信であり、素朴な判断であり、弁証家よりも寧ろけなし屋の精神です。私は感情の行き過ぎが何故弁証法の濫用と一致させるのかを探り出すのは止めます。それは〈神学〉の秘密ですが、明るみに出すのは難しくありません。私が愛するこのフランス人は、恐らく偽善を恐れて、モラリストにも音楽家にも詩人にもなりません。偽善は真の意味で喜劇役者になります。モンテーニュはその意味ではお手本です。モリエールも同じです。ヴォーヴナルグは、私が描きたい人間のこの交配に多くの観念を与えますが、精神的に処女の娘のように顔が赤くなるは青春の時です。年齢と共に臆面のない人になります。見かけに反してバルザックはスタンダールと同じ位に、あるが儘を説明するのに打って付けです。というのもバルザックは、社会の喜劇役者というあらゆる偏見を意志的に抱いていたからで、重々しくて曖昧な散文が良くありました。しかし、本当の散文には何らかの明晰さがあり、夏の終わりには何らかの判断があり、そしてなぐり書きにも何らかの特色があります。情熱による運命についての何という見方でしょう。肉体にある情熱との何という関係でしょう。そうです、バルザックの小説『谷間の百合』でさえそうです。お、クロシュグールドの

館の詩です。晴れた空、変わり行く雲からの光です。この人間の製品には欠陥があるように私は思います、それは気難しく身に付けている奴隷、世帯、野心、美徳でさえあり、そのフランス人の年齢に戻ると五十歳代の熱狂に身を投げ出すものです。この曲がり角には注意して下さい。

(次章へ続く)

二つの崇拜
(DEUX CULTES)

1916年4月13日

宗教は、もし主張がなければその中から命じたり罰したりして、外部の強制が無い力としての社会集団以外のものではないと社会主義者たちは考えています。この考えは未開人の宗教を見れば良く分かりますし、それは組織された宗教というものの確かな特色です。それ故に社会的意識を厳密に受けて、良心の厳格な責任を説明する好戦的精神が、ポリネシア風の宗教と容易に一致しても驚く必要はありません。カトリック教とキリスト教はこれらの神秘的絶対的力に順応しています。しかし、最も高級な宗教はこれらのものの上にあるように私には見えます。私個人としては〈神〉を信じるとは敢えて言いません。寧ろ人間を信じますし、人間がやりたいことに専念しないとしても、この世界には正義も美も命令も何もありません。

恐らく、それが〈神〉を信じるということです。私には分かりません。言葉は殆ど関係ありません。いずれにせよ、私は神学者を生みたくありません。しかし、私はその点について熱心なカトリック信者から証拠を受け取りましたが、それは厳格な崇拜であり、その上自由で、あらゆる範囲に理解力があって力強い精神です。雄弁が力強く、そして殆ど好戦的な社会学者たちの講演の時に、穏やかな調子でしたが彼は人々に一度十分話をしたいと思っていた孤独の人の声で答えていました。その時彼は、この世の精神とか自由を委ねられているものを要求しました。精神や自由の宗教は彼にとって大変でした。そして、祈りとか宗教的瞑想は反対に、脅威や人との約束やついには現実的なあらゆる騒ぎを忘れながら、自己を見出し深く孤立することであると説明しました。そして、それらを重んじないようなものに抵抗することも全然ないと彼は言いました。精神へ心を傾けるには〈精神〉に向き合うしかないと言いました。もし彼の話が手紙であったなら、その意味は正しくなるでしょう。もし判断する力の代わりに何らかの尊敬を抱いたなら、人は自分自身を意識するでしょう。もしその時、自分に責任と孤独を感じたなら、外部からの救いも無いでしょう。情熱の力を感じながら、もし喧しい群衆のように少なくともそれらを排除したなら、その時は内部の精神は瞑想し、そして言うでしょう。もし何よりも義務や一人ひとりに話をする共通した精神に全て大失敗して万事休すになったなら、恐らく〈孤独〉の道から遠くにいることはないでしょう。

(完)

真の宗教
(DE LA VRAIE RELIGION)
1916年3月21日

一般に宗教と呼ばれていたり迷信でしかないものを、私は大変に詳しく論じなければなりませんでした。一人ひとりはこの間違った宗教や情熱に隠された関係に気付かねばなりませんでしたし、それは古代の宗教に大変良く見られ、そこでは情熱の活発な活動が何時も眼に見えない神の仕業と見做されていました。現代人が迷信を残して置いたので、情熱による働きが神学上の作り話の巧妙さによって、ありの儘をもっと正しく見ようとしません。それ故に事物をたっぷりと沢山説明しなければなりませんでした。それは或る日シャンパーニュ地方において、フランシスコ修道者の大きな数珠や兜を着けて、少なくとも或る種の同盟者の姿として私は紹介されました。もし私がこの曖昧な言葉から逃れなかったなら、神々から送られて来たときよく私が言っていた沢山の力と共に、純真な好戦的精神を私は説明していました。迷信による最悪な危険は、本当のことであると言うことです。しかし、それは本当のこと無く間違いなのです。

真の宗教は最良を言うのであり、そのイメージは人間の倫理で最も高い思想を決して歪めません。その時、言葉で話すことなど重要ではありません。ミサへ行くとかプラトンの本を読むこととかは、重要ではありません。その二つが望んでいるのは、言葉がそうであるように注意力と精神です。

善良な女性が私に言いました、「この戦争はそんなにも早く終わりません。神が非常に怒っているのです」。最初の瞬間、あなたは何でも宿命論としてなお理解したいと思います。しかし、もっと良く見詰めるなら、あなたは正義や希望というものをそこに見出します。何故ならあらゆる言葉の意味において、〈精神〉が侮辱されたのは本当であるからです。私は悪魔的なこの情熱の支配を十分に述べましたし、戦争になったのもそこからであり、情熱というものが引き起こしているのです。その歳取った善き女性はその他のことは言いませんでしたけれども、彼女は考えたことを十分に分かっていないのです。唯一許されない本当の罪は間違った神を崇めることである、とあらゆる宗教は密かに言っています。そして私は自分の言葉として言うのですが、精神に対する真の間違いは情熱を生むまでに肉体的感情を崇めることにあるということです。というのも肉体における混乱は、私たちよりももっと大変に強い多くの原因によって突然に起こるからです。そしてこの混乱は、全く純粋なメカニズムに照らせば決して混乱になりません。しかし、これらの盲目的な活動を理性に変えて更に神学化することは、もしこの表現に一つの意味があるなら、本来的に〈神〉に背くこととなります。裁く当事者である私たちはこの時、売春婦になって汚れます。禁欲主義者たちは恐らく、「間違いは全て同じである」という有名な逆説によって他のことを理解しませんでした。私は従って、最も純粋な宗教は戦争を非難するのを躊躇うのが理解出来ます。何故なら戦争は正義でしかなく、あるいは人が言いたいように崇められた情熱による自然な結果であるからです。戦争は間違いではありませんが、言葉として最も深い意味においては寧ろ罰です。情熱が戦争へ行くのであり、そしてそれを望んでいるのです。他人の情熱もそこへ駆り立てるのでしょうが、やって来た戦争は最早非難する時間などありません。遅すぎますが、以上が〈精神〉の判決です。法に従う必要性によって力には力に反対すること、恐怖を克服すること、そして誓いを守ること、これらの必要性の全てによってより深い結び付きが感じられようとなります。そして今のこの難局において、精神も本来の資力によって同意しなければならぬのが何よりも最大の不幸です。ローマ教皇も同じですが、祈りと希望が無い訳ではありません。しかし、ローマ教皇や祈りの言葉はいつでも良く、今は私たちの希望や祈りを点検しましょう、それが判決であり解決となります。

(完)

熱心な人々の地上の平和
(PAIX SUR TERRE AUX HOMMES DE BONNE VOLONTÉ)
1916年3月21日

私は戦争の原因を十分に説明しましたし、如何に純真な人たちがそこに身を捧げ、如何に純真な見物人たちが彼らをそこに追い立てるかを十分に説明しました。私は好戦的美徳を強調しませんし、それは本当の人間を見せており、信じられない程に最良の人であって、自分の欲望を抑制するのが大変に容易で、自己愛、怠惰、他人の不幸や偶然を当てにする下劣な望みから離れるのが大変に早い人なのです。偉大な愛は、虐殺の中でも見せられるのであり、二つの側面があります。それで敵に接近すればする程、少なくともその行為に結びついた判断力を無くしたこの怒りを経験するようになり、敵を愛するために自分自身に基づいて行う努力は少なくなります。人が慎重な野心を忘れて仕舞って関わり合う活発な口論のように、それらの鬭争は情熱を軽蔑する生き生きした友情から殆ど何時も追い出されるのを、一人ひとり経験から良く知っています。そこには恐らく、根強い希望の基礎があり、それによればこの戦争が最後の戦争になります。しかし、今は精神がくるくる変わり、情熱に再降下しています。というのも復讐心、国民による粉砕、今日の空想的同盟の持続によって、それに期待したいからです。そのことは、私には包み隠されてか盲目になっている信仰が最も重要でない証拠になっています。司祭の宗教は全てが曖昧です。そしてその精神は地上から大変に遠い希望と辛い降下の間で動き回ります。そこから生じるのは無言の怒りであり、最も気高いカトリックの心を台無しにする精神の辛辣さです。そして、ロマン・ロラン自身は、良く予想の出来て容易に説明のつく熱狂に非常にびっくりさせられます。人々は藪の棘に腹を立てますし、取分け一瞬のこの怒りを思想に変えられるのでしょうか。そこから私が抱く観念は崇高な見方が余りに多くの障害を示すことなく一瞬しか道を照らさず、結局のところ特殊な各々の事物における真の原因を認識することが自分自身に対する戦いとは別に、その人間を唯一救い出すことが出来たのであり、それは利益も希望も無く戦争によって大変忠実に表されます。従ってその証明は無駄であり、その美徳は全てが不毛です。けれども私は奥深い宗教的魂を理解していて、その人の中の信仰は全てに反対するには非常に強く、希望も無敵です。それでもやはりその人の小さな理性が許したり愛したりする本分まで、情熱や悪口に基づく掟を守ります。しかし、全ては死んで情熱に再び落ちるように私には見えますし、最良の人々も同じであり、この昔からの感情によってそれに従う宿命論者は神が苦難の時代と浄化の時代を定めたのであり、それらは一つであると認識します。浄化は当時のことであるのに、もし私が望めば、戦争や情熱の最中でも行われます。以上は大袈裟な言葉ですが、それは良く見るべき後悔を生んでいる沢山の怒りを取り除いてくれます。ここで私は司祭たち、教条主義者たちを敵に回しますし、弱者や悲しい者や病人や老人たちも敵に回します。そして、それは重要なことではなく、もし憎しみには憎しみで応えることがないなら、実際に私は彼らを理解し許します。そして、それは義務からではなくて、原因を明らかにしようとするからです。もう一度戦争に反対して、戦争を導かないように目覚めて下さい。しかし〈教会〉の言によれば、〈希望〉が美徳である熱心な信者を私は何よりも呼び戻したかったのです。如何なるローマ教皇の言葉でも良いので、罪と罰は私たちの意志によるのであり、先ずは目覚めていれば外部からの救済が決して貧しく無防備にさせることはなく、独りでいることが豊かで堅固になるというそこから理解して下さい。そして恐らくカトリック信仰の土台は、この自由を確立する中で無駄な証明に反対し、権力というものに反対することにありのです。人は私に説教を伝えます。私は修道士連盟の説教が嫌で恐れます。

(完)

愛は勝ちます
(L'AMOUR VAINCRA)
1916年3月24日

愛は憎しみに勝ちます、そしてそれが正しい勝利です。何故なら私はそこに決して敗者を見ないからです。スピノザはその様に語っていますが、余りに抽象的な理性によるものです。そして、確かに良き魂はあり、その中には文字通りに「希望」があり、この希望は用心深くて力強く、証拠を要求することはありません。それは私たちをこの偉大な愛が孤独であり続けるように情熱というものですっかりきれいになった人間になって、恐ろしい戦闘から戻ることもあり得ます。というのもそれはあなたが沢山の騒音の後で正確な音を最後に引き出した防御物のように、彼らの魂を大いに叩いたことでもあり得るからです。しかし余りに確実に、戦争はこの完全な段階に導いた人々を破壊します。それ故に私は哀れな希望しかない人々のために、彼らの原則によって物事を説明したいのです。もし憎しみが言っていることを全て考えたなら、もしこれらの間違った狂人たちや大袈裟な演説や雄弁な理性の結び付きを全て拒否しなければならないとしたなら、愛は擦り切れるでしょう。愛はよく擦り切れます。矛盾は憎しみを激化させますし、結局両者を苛立たせます。それ故に誠実な弁明と呼んでいる情熱というものからは何時も逃げて下さい。情熱の力はこれらの狂った理屈の中には全然ありませんし、不愉快な痙攣の中にあります。これらの理屈は叫びでしかありません。取分け、打ち勝とうと決して努めないで下さい。それは罨です。熱狂者は非難しか待っていません。絶望に貪欲です。明確に分かりたいのであり、裁かれないのです。ですから彼が嫉妬深い者、不義の人、嘘つき、獰猛な者、喜劇役者であることを証明しなようにして下さい。それに子供の美しいお話がありますし、私はあなたにキプリングの『道化役の赤ん坊』を贈ります。そして私は、軽率な非難ですがそれを確信している嘘つきで怠惰な少女を知りました。激しい口調の演説は粘土のように子供たちを捏ねてもみくちやにして、人間の性格を誇張した行為に表します。それは情熱の模倣の結果でしかなく、もっと考えるなら情熱というものは、言い訳として待ちわびる刑の宣告の結果でしかありません。結果が反対の時に、あなたが冷酷な裁判官のようにあなたの性格を正しく分析することは別にしてもです。そして、それが彼の中にあるようにあなたの中にあるのが戦争です。

それ故にこれらのことを理解し、この惨めなメカニズムを支配した時に、体操の方法でああなたの中の憎しみを先ず鎮めて下さい。それらは腕を伸ばすように、意志が行うことの出来る事柄です。私は体験から話せます。怒りには毅然と堪え忍びます、そして今でも何時も十分に予測する術を知りませんし、更にすっきり止めることも知りません。しかし、私は自己をなくして走らせて置くことを知っています。それは運転手のいない機械のようで、遠くへ行くこともありません。そして私は更に、他人の怒りを上手に受け入れることも知っています。私が戦争に慣れて如何なる騒音も受け入れたように、実際には恐怖は無く、反論もせず、戦争への準備も全然ありません。結果は何時も私の期待を裏切りました。期待した反論も無く、模倣や喜劇という心の糧も無く、それは子供の怒りとは似ても似つかない辛い情熱というものです。そして、乳母たちは子供が泣くと笑ったり歌ったり筋肉を優しく摩ることをよくやります。しかし、何なのでしょう。全てを忘れなければならないのでしょうか。大変正確に心を打つ言葉とは何でしょうか。雄弁には毒が盛られているのでしょうか。その通りです。忘れるということです。子供の怒鳴り声以上の世論は最早ありません。しかし、断固として否定しなければなりません。あそこの狂った教条主義者たちを同一の精神とあなたが考えられるまで努めて下さい。そして強くなって下さい、彼らは戦争の最初の活動も伴っています。しかしながら、それはわざとらしい悪口や型に嵌まった定義としての五十年間の結果でした。敵は人が定義したのと同じでした。巨大な見本です。それは巧妙にも大砲の一撃以外に最早意味することはありません。それは暴力でしかありません。メカニズムでしかありません。私はそのことを強調します、何故ならその精神が生まれ

つきの活動を夢中で拒絶しなかった限り、その同意だけでも犯罪を犯すからで、屢々僅かな気難しさとか、大いなる高慢さとか、悪口を許した後の沢山の軽蔑とかが残るからです。

(完)

不手際
(D'UNE FAUSSE MANŒUVRE)
1916年3月29日

気に入った情熱に話しかけなければ、平和の事業の時には屢々勇気がすり減ります。例えば、もし二人の人間の間にある脅威と悪口を止めさせたいなら、率直な欲望によって彼らの権利として良識を回復するのを人は見分けて説得しようとしみます。ところでそれは不手際です、というのも情熱の話においては見分けられるものは何も無いからです。もし言葉よりも寧ろ物音に注意を向けたなら、本当の危険と救済策をもっと良く理解します。怒ることが間違っているとか証拠が間違っている、と怒っている人間に証明して欲しいと思うことしか最早何も否定しません、というのも怒って言っていること程愚かなことはないからです。それらの言葉は立証するようなものではなく、筋肉という肉体に従っています。その中には思考は決してありません。騒音は意味づけることもないし、反駁することもありません。全く単純には鎮めることがありません。ですから不必要な仕事も決して行いません。二人の頑固者を前にすると今度はあなたが喧嘩腰になり、そして直ぐに戯言を言う危険があります。ですから友情以外のものを主張せず、憎しみそのもの以外のものも否定せずに、十分明白に表された友情只それだけから始めて下さい。理性は理性を否定し、愛は憎しみを否定します。ですからこの憎しみを外国語に訴えないで下さい。そして、言葉よりも一段と口調によって言われるのでしようし、それは情熱による模倣が申し分なく行動するためです。

あなたは最初の瞬間、決して私を信じていないのが分かります。しかし、信じようとして下さい。表情の力を知るには、際限なくお互いに憎み合っている二人の狂信者は、しかめっ面ではなく善良な微笑をしようとしたに違いありません。しかし、平然としていなければならず、悲劇だと分かるには動作によるものは何も無く、顔の表情以外に何も無いと私は理解しています。この大戦から戻った者たちにとっては、少なくとも何らかの軍務についています。そして表情の慎重さ、他人の生き生きした表情に対する用心、政治的な巧妙な駆け引きが結局のところ真の礼儀になるのであり、その虚偽の中にお互いに同じものを見出すのです。

調停者になれば、確かに容易にそこへ到達します。しかし、もし憎しみや中傷や脅かしがあなた自身を狙っていたなら、如何なる野望も話もなく、一番誠実な友情を感じて単純に示しながら、本当の魔法である真の反撃を起こして下さい。「しかし、私は望まない。彼は嘘をついている。人々は何と言うだろうか」。ですからあなたはそこで人々の噂による偶然から、殺人によって終えることが出来る冒険に這入り込みます。ここでの悪は、鎮めなければならない時に推理することであり、〈平和〉と同時代における〈正義〉を探し求めることです。それらは二つを追求します。議論による〈正義〉と、体操や惰眠による〈平和〉です。〈戦争〉に対する〈理性〉は決して結びつきません。理性には〈理性〉によってしか反対しないで下さい。応えるべきことが何も無いとか、調停人の前では間違っている情熱を持った人間は最早何も腹を立てません。そして、外国勢力の中での理性は、余りに侮辱される危険を負っています。その侮辱は彼を許しません。ですから情熱によるこの賭けをよく調べて下さい。子供や友人や、同時にあなた自身についてもそれに関して調べて下さい、そして人間の大きな激情の嵐が起き始める時に、あなたは少なくとも経験豊富な人間が可能としている節度を持つこととなります。

(完)

権利と能力
(DU DROIT ET DE LA FORCE)
1916年3月30日

前章で行っている考察、そして一人ひとりが情熱のメカニズムをよく観察したかどうかを容易に理解出来ることが、もう少し抽象的な問題や寧ろ理論的問題に取り組めるようになると私には見えます、しかしそれについては多くの親切な人々が自分たちの能力を無駄に使っています。恐らくそのことを思考するには、〈能力〉の観念がそれ自体素っ裸で現れるのを待たねばなりません。その時は〈能力〉が如何なる権利も与えないということです。それは事実として先ず公認された権利を強く主張するに違いありません。しかし、以上は言葉だけで、権利は公認されているのです。係争中で何度も出頭させられている当事者たちが情熱を決して高めないために、調停者に自分たちの理屈を申し出てお互いが同時に納得し会う時は無垢な状態にあります。権利は同意されます。判決文はその時全員が受け入れます。その判決は押しつけられたものではありませんし、一人ひとりの最も自由で最も隠された思考として、もっともなものになっています。その様にして如何なる権利にも〈能力〉は決して混合していませんし、この言葉の如何なる意味において如何なる強制もありません。能力に対して権利を主張することは、それ故に意味の無いことで、情熱に対して議論するようなものです。権利に対しては権利があります。能力に対しては能力です。そして、それらの順番を取り違えると危険で、この間違った運用が生まれるのは情熱による詭弁です。権利のために戦うことも又意味がありません。というのも権利は密かに情熱によって公認されていなければならないからです。そして、能力は情熱を振り落とします。そこから平和は決して戦争から生まれず、絶対に生まれないことをもう一度人々は理解します。勿論、私はそのことをよく言って来ました。

これらの原則によれば、もっと強い〈権利〉や同種の別の怪物を調べなければなりません。武力衝突後には、死者たちや疲労や忘却や、結局は情熱の不安定さによって多分、各々の権利を新たに述べて、認めることが出来る時代がやって来ると言えるのが全てです。しかし、戦争は何も手伝いません。継続した平和によって、より大きな確信が生まれます。平和は平和を生みます。戦争は戦争を生みます。しかし、情熱家というものは精神を強くしたいと思います。それは武装する権利を望み、他人を強制するのを望むのです。少なくともこの権利は最早権利ではありません。ジャン＝ジャック・ルソーが『社会契約論』の短い章の中で、勿論大変に意味深く指摘したように、服従する義務が強くなっても倫理上の秩序は少しもありません。倫理上の秩序が最も強くならなくなるや否や、服従する義務も消えています。そして倫理上の秩序が最も強くなるだけ、服従する義務は自明のことになり、人はそれを望むか望まないかです。ここで勝利することは思考がそれらを試す代わりに力の結果を予想することであり、その様にして〈力〉を見分けて或る種の尊敬の念とか約束を与えますがそれは奴隷であり、権利を守るのと全然似ていないしそれは何時も自由である、と私はつけ加えて言います。

(完)

要求
(DE LA REVENDICATION)
1916年3月31日

作られたばかりの榮譽を最も良く説明するために、私はここで純粹で單純な金錢欲及び権利の要求との間にある何らかの深い相違を気付かせたいと思いますし、それは人が持ちたいと思うものをあらゆる方法で奪うために身に付けるものです。要求する者は、手に入れようとしていません。彼は、少なくとも自分の権利が皆に認められて、先ず議論が開かれるのを望みますが、議論によって拒絶されます。彼は、納得するか、納得させられたいのです。訴訟人は当然、泥棒ではありません。訴訟人が殆ど何時も探しているのは、彼自身には明白に見えることを他人に認めさせることです。そのことは情熱をそこに入れたくないとは決して言いたくありません。しかし、力による勝利でないのを望むことは、権利によって勝利することであり、議論の大勝利です。そして同様に、もし敵の理屈が認められれば、それを持たされることになります。それが裁判の精神というものです。実際に訴訟人は屢々、理性に耳を傾けようとしない悪意を見せますが、泥棒の魂胆と似ているものは何もありません。結局のところ適切な言葉を用いて言うなら、泥棒は物の所有を望みますが、それは行為です。訴訟人は所有権を望むのであって、それは権利です。力の方法に権利の確立が含まれていないのは多分、ここではより明白に見えます。

その点については論争を始めないで下さい。共通使用に従って共通觀念を十分明確にする配慮を持って、兎に角そのことを考えて下さい。何故なら戦う者は、唯物論者と同じに呼ばれている否定的な主張を非難しますし、それに従うなら公認の力とか明白な力とは別の権利はこの世に決して無いことを私は予想するからです。何かを元にして、彼らの議論は全く単独に行われます。力が最早明白であるや否や、権利は疑わしいと言われるでしょうし、力は試さなければなりません。戦争は力の試行以外の何ものでもありません。勝利は優位な力を認めさせますし、その考えが受け入れられれば受け入れられる程、それは新しい権利の秩序の基礎を築きます。二つの觀念の代わりに、私にはもう一つしかないのを除けば、何かに関して言うべきことは何もありません。失敗した叙述です。宿命論者の主張と共に單純化された逆説の体系的な關係が役立つとは気付きますが、それは情熱家の哲学です。私が如何にこの点について私の觀念を明らかにしたかを少なくともあなたに言う意図を持ちながら、私はもうこれらの口論に入りません。もしあなたが同意するなら、あなたの同意はあなたの正直な精神活動から生じます、すなわち私は決してそれを望んでいません。そして、それも又私がここで拒絶する、或る種の戦争であるのがあなたには良く見えます。

(完)

戦争論とその他の怪物たち
(DES TRAITÉS DE GUERRE ET AUTRE MONSTRES)
1916年4月1日

制度の精神は原則によって全てを容易に説明します。しかし、良識にはもっと多くの要求があります。不注意から奇妙な観念を混ぜると、最早認めません。戦争論も人間として考えるや否や、それと同じ不安を与えます。何故ならそれらの戦争論は、権利を定めることを強く主張するからですが、同時に当事者たちの一部の同意も力によって手に入れます。従ってこの種の論によって不適切に平和論と呼ばれて、戦争状態は片付けられるよりも寧ろ組織されます。というのもこれらの論によって最も弱い者が力を持つと、少しも義務を負わせられないからです。もし権利が何ものかであったとしても、それらの論と共に理解すべきことは何もありません。言葉として正確な意味で平和論は、議論や自由な同意によって、正確な法律的取決めとなります。そして一般には契約のように、二人の当事者の関心はそこで利益を得ます。しかし、特に目撃者としての良識とはそれらのことを言うことであり、著名することです。あるいはもしあなたがこの品位から逃れたいのなら、その時は権利を否認して下さい。それと同じ指摘は戦争で問題になる権利についても言えるのであり、それは私生児のことでもあります。空しくも人は前もって慣例を作ろうとしていますし、お互いに戦う日のために両者は同意しようとしています。本来の美德による戦争は、強く要求されたこれらの権利を全て壊します。それ故に戦争に規則を課せるためには、何か優れた力がなければならないと理性的に人は言います。野蛮人に値する態度に対しての良心からの憤慨に関して、それらは厳密には防衛にならない戦争行為というものに対しても同様であり劣るものではありません。しかし、この観念はより豊かな発展を望んでいます。私はあらゆる軍人の例をもう一度引用しなければなりません、彼らは厳密には自ら戦うように強制されていて雇われているのですが、まるで自由な同意によって戦っているかのようです。美德を押しつけることと権利を課することは、何時も同じ間違いを犯しています。そして、もし読まれることに真実があるなら、強制や力でしか武器を取らない人々は全てが市民生活を拒絶しなければなりません。でも、そうではありません。彼らは無理せず行いますし、まるで自由であったかのように雇われます。権利に似た何ものかと力の痙攣を混同させるのは、既に無駄な努力です。内面的混同や本当の恥ずかしさからこの種の間違いで罰せられなくなかったなら、心の中では完全に断念しなければなりません。

(完)

正当防衛
(DE LA LÉGITIME DÉFENSE)
1916年4月2日

力による力を拒絶することは理性的であることを私は躊躇せず認めますし、その上私は何時も行うように共通観念と情熱によって洗われた観念を同時にすることしか思考と呼びたくないので、私は共通観念を表現することしか行いません。しかし、正当な防衛という共通観念は、まさしく復讐の情熱によってより容易に歪曲されています。力の行使が殆ど何時も、如何に肉体を引きずり込むかを私は説明しましたし、取分けもし体操や礼儀がなければ、行為を歪曲するのは痙攣的活動であり、その結果が出た後でも長い間飛び回ってなお力の行使を延ばしています。肉体に肉体を重ねる行為が生じるこれらの活動は、明白な色彩を持ち、心を引く言葉を伴う生き生きとしたイマージュによる思想を自然に表現していることも私は述べました。正当な防衛はこの様な情熱に目覚め、特に最も穏やかな心に目覚めるのは明白です。何故なら力の一撃に十分準備されていないからで、何よりもびっくりさせられる時であるからです。そして多分、最も平静な人間であるなら予想していることが賢明であり、そして例え狂人とか病人の先生になったとしても、厳密にはなる必要のない熱狂や活動であってももう少し予想するのが賢明です。それは憎んだり疑う権利があることを、強く主張するまで防衛の権利の限界を広げる理屈はありません。憎しみは憎しみを引き起こします。疑いは疑いを引き起こします。私が見せられたように、これらの感情はまさしく拒絶したい出来事の原因です。防止する防衛活動、取分け国から国への防衛活動は攻撃準備と余りに良く似ています。防衛に有効な唯一の方法として攻撃は最大の防御という有名な考え方が示しているように、防衛活動が少しずつ実際の攻撃準備に変わらないように気を付けなければなりません。同様に大勝利の後には、自然な訓練が再び安全を手に入れるために、何時も暴力行為によるとか脅威と共に支えています。ところでそれは戦争状態を止めさせる意向と共に、それを継続させている以外の何ものでもありません。そして、迫害に夢中になっている不幸な者たちは、より良く自らを守るために、脅すことが巧みと思っている人々に大きなイマージュを与えています。それ故に私は、正当防衛を道理に叶ったものに限定するためには、戦闘のための厳しい訓練と堂々とした勇気がなければならないことを屢々考えました。そして、その意味において攻撃的な戦争でさえも取分け恐怖の結果であると言っても悪く言われません。この文章を読む勇敢な人間は、自分の勇気とこの不幸な年に手に入れた彼自身の能力を良く判断したいと思うでしょうし、彼が狂った希望も脅威もなく、彼と軍隊仲間は本当の防衛準備が出来ると思っていることを私は願っています。その点で統治者たちの見解を多く抑制することは重要であり、何時もは余りに歴史に導かれており、屢々情熱による喜劇役者になっており、そのことは何よりも最悪です。私はここで大変に的確な推測を提案するに止めます。もし1914年夏に、一年後に実行したように武装した塹壕の戦線が三倍になって我が国の国境線全てを見張ったなら、パリは襲撃されるかもしれなかったと人は考えるでしょうか。しかし、この考えは止めましょう。私にとっては余りに興奮させられますし、余りに要求も多すぎます。告発している間に、他の人々はそれと同じ間違いに幸せにも夢中になります。そして、復讐の精神による悪の連鎖が再開するのが分かります。従って私は立証したかったことに戻ります。そして、私はそのことを十分に言いました。

(完)

二つの確信
(DEUX CERTITUDES)
1916年3月24日

二つの確信があります。一つは宿命論によるものです。私は指名されます。神がそれを望んでいます。この宿命論は、私たちの主な敵の国に浮き上がってきて見えるのは余りに明白です。そして、私たちがもし間違いも又告白して補ったなら、罵られることなく認めることができます。このドラマは答弁の中に全ての論理がありました。しかし、それは少なくとも痙攣であり、二つに分かれます。人間の不幸は、もしそれを少なくとも立派に判断したなら、薬が無い訳ではありません。歴史家たちが判断して歴史をきれいに純化させるように、私はそのことを良く言いました。もう一つの確信は自由によるものです。私が支持するものです。私は私自身のためにそれを誓います。如何なる意地悪な女予言者も私は恐くありません。前者の宿命論は大聖堂のパイプオルガンのように、〈世界〉の中で決して鳴っていません。もしそれが誓いによるのでなければ、鳴っているのは人間だけであり、予言もなければ希望もありません。

(完)

意地悪な人々
(DES MÉCHANTS)
1916年3月25日

私は生まれつき、悪を行うとか単純に悪を望む人々を見て、酷く傷付けられることは決してありませんでした。反対に何時も私が脅えていたのは、意地悪さとは違う他の種類のものです。そのことについてはこれから言うでしょうが、苛々しないで微妙すぎる言葉で続けることになります。恐らくそれを読んでも、宿命論への執心とか自由への恐怖が、人々が望んでいるようにこの世の本当の悪であると未だ良く把握していません。恐らく彼は寧ろ、戦争に反対する憲兵の或る計画をこの本の中に探しました。多分、私とその問題の根拠としてやる気が無いことを、彼は結局のところ望んでいます。というのもそれが彼の頑張ることになるからです。それは冷静なく理性と成熟した判断を外観からも与えています。しかし、不屈の青春がここでは行為と注目を要求しています。いずれにせよ私が審議会に座らせたいのは不屈の青春です。それは十分に報いてくれた権利です。

私が運命に支配されている人間を証明したい時、彼は議論によって反撃します。そして、それは自然なことです。〈宿命論〉は明白で力強い弁証法を齎し、それは論争の時には優位を与えます。しかし、ここにあるのは奇妙な表現法で、その論証は怒りや対象がなければ決して結論が出ないもので、それは私にとっては長いこと驚きであり、今の私を照らしてくれます。その上に何か悪い宣誓が行われます。人は敢えて行おうとしませんが、正当化したい悪のために当然のこととして或る種の許可を要求します。その様な事柄は理論的論争においては剥き出しになり、少なくとも哲学者には決してあり得ませんが、実践的な人間、相互扶助論者、社会主義者、法学者、そしてその場しのぎの集団の人にはあり得ることです。学校には偏見がありませんし、悪い教養もありません。それは思考による最初の成果です。やらねばならないことが沢山あるのを恐れて譲位する王のようです。

悪が近づき、確実にあって、明白になればなる程、感情は鋭くなります。殺人や死ぬ程の苦痛が論じられる時、犯罪や懲罰という行為は決して私には恐くありません。それは歴史においては些細なことであり、些細な流血です。私はしかも治安大臣になったかのように見えますし、後悔もありません。同様に戦争の結果というものも、あなたが信じているよりもっと私を平静にしてくれました。人を殺すのは些細なことに違いなく、私たちよりも強くて大きな力が絶えず脅しているに違いないことを私は知っています。私は噴火するこの惑星での人間の活動状態を受け入れます。それは上手くやらねばなりません。そこの周りには不幸があります。悪は、人間の悪の源へ行きたがっている者に対して、この怒りの中にあります。私が殺人者や死刑について議論した時、野蛮な喜びをいち早く発見しましたが、それは事件としては余分なことでしたし、まるで署名されたあらゆる有罪宣告が、見物者の情熱のために署名もなく白紙で承認されたかのようにした。この喜びは罰を台無しにします。それは私には犯罪以上に怖いものです。

戦争も同じことです。戦争を受け入れる人々の熱狂及び戦わないこと、そしてそれらが人間の運命を完全にするように、この承諾を手に入れて実現すること、以上は私には耐え難いことです。眼や耳を打つ瞬間にしか爆薬を恐れない者たちがいることを私は知りました。しかしこの私は、この黄色い火薬を恐れます。従って、打たないし脅さないが、非難し咎めるこの悪い意志を私は燃え上がらせて血まみれになって見ているのであり、沢山の罰を受けています。その意志についての陰鬱な呪いが頑固な子供には見えており、許しを拒んでいます。しかし、その子供は従順で忘れっぽいのです。大人は自分が探して望んだ沢山の証によって腹を立てて気難しくなり、黄ばんでおり、失望したり満足したりします。何故なら彼は何回も予言したからで、そこにいるのは私が和らげたいと思う気難しい友人です。そして、彼が私を見抜き、それを望んでいないことを私は知ります。彼は私を見るや否や、ノン（否）と言います。しかし、書いたものは話す言葉

よりも都合が良いものです。そして、その人は読むことを覚えます。但し、私の力は彼の王国との国境で消えます。彼は自由に時間を使う名人であり、そして三百人の見物人は安楽椅子で彼ら自身に同意したいのですが、何という未来でしょう。恐らく、戦争がなくなることはありませんが、少なくとも〈精神〉による同意はなくなります。

(完)

本書は、Alain, DE QUELQUES-UNES DES CAUSES RÉELLES DE LA GUERRE ENTRE NATIONS CIVILISÉES (Institut Alain, 1988)の翻訳である。

アラン（本名はエミール＝オーギュスト・シャルティエ）は、1906年2月16日から1914年9月1日までルアン新聞（La Dépêche de Rouen et de Normandie）ヘプロポ（語録）を毎日発表していた。それらを纏めて『一ノルマンディー人のプロポ』が刊行された。（そのガリマル版第1巻（1952）は既に、上・中・下巻として高村昌憲訳でパブーの電子書籍として発表している。）

その後、第一次世界大戦が勃発すると同時に志願兵となって参戦したアランは、マリー・モール＝ランブラン夫人と絶えず書簡をやり取りしていた。その中の1916年1月14日から4月17日までに書かれたものは、一冊の本になることを念頭に置いて書いた最初のものであった。モール＝ランブラン夫人は、それらの書簡を赤いノートに写し取っていた。いわゆる〈赤原稿〉と名付けられたものである。アランは8月5日から12日までの二回目の休暇の時に、それらを読み直しながら5月9日付けの3章（第28・40・68章）を追加して81章とした。他方、4月8日から8月1日までにアランは哲学的認識の思想に関するものにも着手した。それらの書簡を書き写したモール＝ランブラン夫人の青いノートに書かれた〈青原稿〉は、『精神と情熱に関する八十一章』（1917）として刊行された。しかし、前者の〈赤原稿〉はその儘モール＝ランブラン夫人の手で保管されて発表されることはなかった。何故なら当初予定していた発行者のカミーユ・ブロックが躊躇したために、アランは何時もやるように書いたものを修正するのではなく、全て新しく93章を書いて刊行したからであった。

この様にして『マルス又は裁かれた戦争』（MARS OU LA GUERRE JUGÉE）93章が、戦後の平和時に書かれて1921年に刊行された。更に、20章を追加して1936年版が刊行されている。邦訳書も21年版は串田孫一・加藤昇一郎共訳『マルス—裁かれた戦争』（思索社・1950）が上梓され、36年版は白井成雄訳『裁かれた戦争』（小沢書店・1986）が51章の抄訳として上梓されている。

ところがアランの死後37年経った1988年に、アラン研究所の所長ロベール・ブルニュ氏らの手によって、未刊行であった〈赤原稿〉が公表されたのである。これはアラン研究所がアランの未刊作品を6部門に分けて20巻の刊行を企画した第2巻目に当たっている。6部門とは著作、日記、自伝、書簡、詩と翻訳、研究であり、全作品集として収集されていく「アランノート」である。その第1巻はフランス国立文学センターの協力で1985年8月に刊行された『神話と伝説』であり、未刊作品企画の第2巻として刊行されたのが、アランが戦場にいる1916年に遡って『文明国の戦争で真の原因になるもの』と題されたこの重要な未刊作品であった。ロベール・ブルニュ氏は次の様に言う。「これは要の作品である。『神話と伝説』においては、晩年の衰えゆく微光のような作品が収められている。ここでは新しい日が昇り、何よりも光沢のある作品になっている」。そういう意味からも本書は、アランがルアン新聞ヘプロポを発表していたジャーナリストから、当初から一冊の本を書く作家になった最初の作品でもあり同氏は言う。なお、本テキストには第二部「モール＝ランブラン夫人へのアランの手紙、1915年12月31日～1916年4月17日」及び第三部「砲兵エミール・シャルティエの道程」（ピエール・ザシャリ編）等が掲載されているが、翻訳書からは割愛した。

翻訳に際しては、戦場にいるアランの真意と感情を出来る限り理解し易いように表したいと思ったが、何処まで成功しているか分からず甚だ自信が無い。色々と至らない点もあると思われるが、それらは全て怠慢な訳者の力不足によるものであり、読者諸氏のご叱正を請いたいと思う。そして出来ることなら本書により、多くの読者がアランの深奥で率直な思想に触れて少しでも文明人としての健全な精神を理解し、平和を志向する充実した幸福な社会の真の礎になって欲しいと願っている。

最後に、フランスにおける渾身の編集により日の目を見た本テキストを、2006年6月12日

にパリ11区のアラン研究所において直接私に贈呈して戴いたロベール・ブルニユ氏に、衷心からお礼の気持ちを表す次第である。

2012年12月吉日

東京西郊の田園都市・たまプラーザの寓居にて

高 村 昌 憲

アラン「文明国の戦争で真の原因になるもの（下）」

<http://p.booklog.jp/book/61491>

著者：アラン（翻訳：高村昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/61491>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/61491>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ